（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第16輯

阪南丘陵開発事業に伴う

金剛寺遺跡

―― 発掘調査報告書 ――

1 9 8 7

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第16輯

阪南丘陵開発事業に伴う

金剛寺遺跡

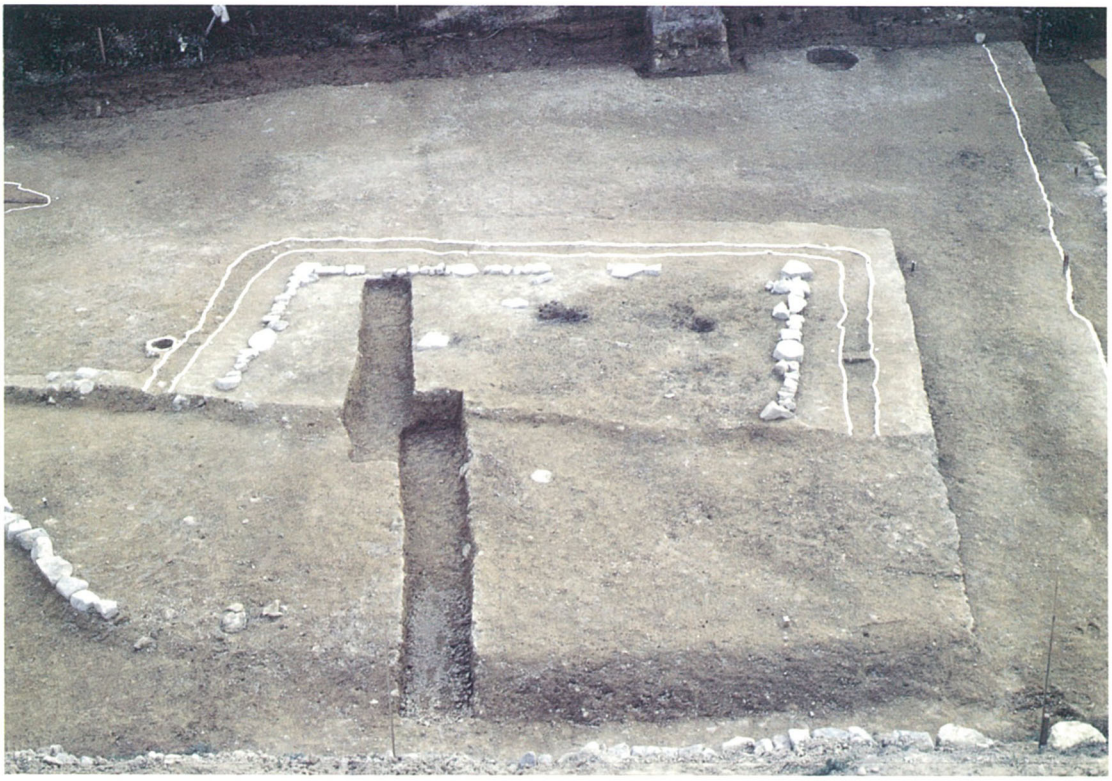
―― 発掘調査報告書 ――

財団法人大阪府文化財センター
蔵書
第18234号

1987

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

金剛寺遺跡遠景（北より）



B区100-OB（東より）

大阪府文化財センター
蔵書
第18234号

序　　文

阪南丘陵開発計画事業は、関西国際空港建設に伴い大阪府南部で計画された土砂採取予定地ならびに土砂採取後の跡地として空港業務関係の従業員用住宅としての利用を計画された事業地であります。

本事業地は、大阪府南部の阪南町に位置し、大阪湾岸より約２㎞程中に入った標高約100～180m程度の丘陵地で砂岩・泥岩等で構成されています。

当該地については、開発計画が立案されるまで、文化財については、あまりよく知られていなく、周辺に塚谷古墳群等が所在することが確認されていただけであります。このような状態であるので開発計画が具体化されてから文化財調査を実施することとなり、本協会が計画地全域について文化財の分布調査・試掘調査を大阪府企業局からの委託を受けて昭和60年・61年と実施した。その調査結果、遺構・遺物等の検出が確認された遺跡について、昭和61年の後半から順次発掘調査を行うことになりました。

今回報告する金剛寺遺跡は、阪南町貝掛に所在し、開発事業地に進入するための進入路にあたり、試掘調査では遺物の包含と石垣跡などが認められていたので調査を行うことになりました。

調査の結果の詳細な事実は、本報告書に記載しましたが鎌倉時代・室町時代の建物跡の礎石や土坑・溝と江戸時代の建物跡・石組の井戸等の遺構を検出することができました。

また、本調査地周辺には、地名で「金剛寺」という小字名が知られているので鎌倉時代から寺が所在していたことが判明しました。

本発掘調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府企業局、阪南町、阪南町教育委員会、その他地元関係者の皆様に多大なるご協力、ご支援を賜り、深く感謝いたします。また、今後の当協会の調査等にご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭 和 62 年 12 月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　浅　野　素　雄

例　　言

1．本書は大阪府泉南郡阪南町の関西国際空港建設工事に伴う発掘調査のうち、阪南丘陵開発事業予定地内に所在する金剛寺遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は大阪府企業局内陸整備課の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第５班（班長　岩崎二郎）が担当し、技師　田中龍男が現地調査にあたった。発掘調査は、昭和62年２月16日に着手し、昭和62年５月25日に終了した。

4．発掘調査の実施に当たっては大阪府教育委員会、大阪府企業局内陸整備課、大阪府企業局内陸整備課阪南分室、阪南町教育委員会および地元関係各位の協力を得た。

5．発掘調査および報告書作成に当たっては、大阪府教育委員会文化財保護課、阪南町教育委員会社会教育課　三好義三氏、池田市教育委員会　田中晋作氏、北野隆亮氏、窪田雅秀氏をはじめ多くの方々から御指導、御教示を得た。記して感謝したい。

6．本書の挿図の方位は座標北、標高はＴ．Ｐである。

7．本書に使用している地区割方法は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が国土座標（第Ⅵ系）を基準に設定したものである。また、これとは別に調査区を便宜的に区分してＡ～Ｇ区の呼称も用いた。４ｍ区画の呼称、便宜的に用いた７区分、文中の記号については、第Ⅲ章第１節に一括して示した。

8．本書に掲載した遺跡分布図には、国土地理院発行の５万分の１地形図「岸和田」「尾崎」「粉河」「和歌山」を使用した。

9．土層断面の色調及び土器胎土の色調については、『小山正忠・竹原秀雄編著　新版標準土色帖６版、1986・４』の色片との比較で記載している。

10．遺構写真撮影は田中が行い、空中写真・測量は株式会社パスコに、遺物写真の撮影・焼付については当協会調査課資料係が担当した。

11．本書の執筆、編集は田中が担当した。

本　文　目　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査に至る経過……1

第Ⅱ章　立地と環境……2

第Ⅲ章　調査の方法……5

地区名の呼称と略号……5

調査の方法と概要……6

第Ⅳ章　調査の成果……8

第１節　層序……8

第２節　中世の遺構と遺物……13

第３節　包含層出土の中世遺物……16

第４節　近世以後の遺構と遺物……31

第Ⅴ章　まとめ……80

挿　図　目　次

第１図　阪南町位置図……1

第２図　周辺遺跡分布図……3

第３図　地区割模式図……5

第４図　調査区地区割図……7

第５図　Ｂ区西壁・東西セクション土層断面図……9～10

第６図　Ｃ～Ｇ区東壁土層断面図……11～12

第７図　32・33－ＯＯ平面図・断面図……13

第８図　78－ＯＸ平面図・立面図……14

第９図　100－ＯＢ平面図・立面図……15

第10図　100－ＯＢ内床面出土遺物……16

第11図　中世遺構平面図……17～18
第12図　土師小皿……20
第13図　包含層出土遺物（１）……21
第14図　包含層出土遺物（２）……22
第15図　包含層出土遺物（３）……23
第16図　包含層出土遺物（４）……24
第17図　包含層出土遺物（５）……25
第18図　包含層出土遺物（６）……26
第19図　包含層出土遺物（７）……27
第20図　包含層出土遺物（８）……28
第21図　包含層出土遺物（９）……29
第22図　包含層出土遺物（10）……30
第23図　Ａ区平面図……31
第24図　Ａ区出土遺物……31
第25図　23－ＯＷ平面図・立面図……32
第26図　Ｂ区遺構平面図……33～34
第27図　35－ＯＢ平面図・立面図……35
第28図　82・83・84－ＯＸ平面図・立面図……37
第29図　85・86・87・88－ＯＸ平面図・立面図……38
第30図　包含層出土遺物（１）……41
第31図　包含層出土遺物（２）……42
第32図　包含層出土遺物（３）……43
第33図　包含層出土遺物（４）……44
第34図　包含層出土遺物（５）……45
第35図　包含層出土遺物（６）……46
第36図　包含層出土遺物（７）……49
第37図　包含層出土遺物（８）……50
第38図　包含層出土遺物（９）……51
第39図　包含層出土遺物（10）……52
第40図　包含層出土遺物（11）……53

第41図　包含層出土遺物（12）……55
第42図　包含層出土遺物（13）……56
第43図　包含層出土遺物（14）……57
第44図　包含層出土遺物（15）……58
第45図　包含層出土遺物（16）……59
第46図　包含層出土遺物（17）……60
第47図　包含層出土石製品……62
第48図　包含層出土石製品……63
第49図　銭貨拓影（１：１）……63
第50図　五輪塔計測部位概念図……64
第51図　包含層出土石製品……65～66
第52図　Ｃ区遺構平面図（上層）……67
第53図　Ｃ区遺構平面図（下層）……68
第54図　107－ＯＢ平面図・立面図……69
第55図　109－ＯＴ出土遺物……70
第56図　Ｃ区包含層出土遺物……71
第57図　Ｄ区遺構平面図……72
第58図　24－ＯＷ平面図・立面図……73
第59図　Ｄ区出土遺物……74
第60図　Ｅ区平面図……75
第61図　Ｆ区遺構平面図……75
第62図　22－ＯＳ出土遺物……76
第63図　79－ＯＩ出土遺物……76
第64図　Ｇ区遺構平面図……77
第65図　14－ＯＯ平面図・立面図……78
第66図　14－ＯＯ出土遺物……78
第67図　Ｇ区包含層出土遺物……79
第68図　Ｇ区包含層出土石製品……80

表　目　次

表１　銭貨一覧表……64
表２　出土遺物観察表……82～96
表３　軒丸瓦・軒平瓦観察表……97～99
表４　丸瓦・平瓦観察表…… 100
表５　丸瓦・平瓦（文字瓦）観察表……100～101
表６　道具瓦観察表…… 101
表７　石製品一覧表…… 102
表８　Ｂ区出土石造遺物一覧表……103～104

図　版　目　次

巻頭図版１　金剛寺遺跡遠景（北から）
巻頭図版２　Ｂ区100－ＯＢ（東から）
図版１　阪南丘陵航空写真
図版２上　金剛寺遺跡全景（東から）
図版２下　調査区全景（北から）
図版３上　調査区全景（南から）
図版３下　Ａ区１・２－ＯＺ（南から）
図版４上　Ｂ区近世遺構面全景（北から）
図版４下　Ｂ区近世遺構面全景（南から）
図版５上　Ｂ区26－ＯＯ全景（西から）
図版５下　Ｂ区31－ＯＯ全景（北から）
図版６上　Ｂ区82－ＯＸ全景（東から）
図版６下　Ｂ区78－ＯＸ全景（北西から）
図版７上　Ｂ区ピット群（東から）
図版７下　Ｂ区23－ＯＷ全景（東から）

図版８上　Ｂ区石造遺物出土状況（東から）

図版８下　Ｂ区石造遺物出土状況（東から）

図版９上　Ｂ区100－ＯＢ全景（東から）

図版９下　Ｂ区100－ＯＢ全景（南から）

図版10上　Ｃ区全景（南から）

図版10下　Ｃ区全景（北から）

図版11上　Ｃ区107－ＯＢ全景（東から）

図版11下　Ｃ区107－ＯＢ全景（北から）

図版12上　Ｄ区24－ＯＷ（北から）

図版12下　Ｄ区８－ＯＯ（北から）

図版13上　Ｆ区22－ＯＳ、25－ＯＯ、79－ＯＩ全景（北から）

図版13下　Ｇ区全景（南から）

図版14　１　Ｂ区出土土師器大皿　６・８　Ｂ区出土土師器小皿　11　Ｂ区出土土師器台付皿　12・13　Ｂ区出土瓦器小碗　14　Ｂ区出土瓦器碗　65～67・70　Ｂ区出土土師器小皿　71　Ｂ区出土瓦器碗　74　Ｂ区出土瓦器皿　212・216～219・222　Ｂ区出土土師器小皿

図版15　171・173・175～177・188・194　Ｂ区出土陶器碗　180　Ｂ区出土陶器皿　199　Ｂ区出土陶器蓋

図版16　77　Ｂ区出土陶器燭台　201・202　Ｂ区出土陶器鉢　205　Ｂ区出土陶器ビンダライ　208～210　Ｂ区出土陶器摺鉢　230　Ｂ区出土土師器火舎

図版17　２～５　Ｂ区出土銭貨　83・84　Ａ区出土瓦器碗　231　Ｂ区出土砥石　289　Ｃ区出土陶器鉢　293　Ｄ区出土砥石　294　Ｄ区出土陶器摺鉢　295　Ｆ区出土砥石　301　Ｇ区出土砥石

図版18　85・86・91・92・97・99・100・102　Ｂ区出土染付碗

図版19　106・108・110・111・114・117・118・122　Ｂ区出土染付碗

図版20　123・125～127・130・131・133・134　Ｂ区出土染付碗

図版21　135・136・138　Ｂ区出土染付碗　142　Ｂ区出土染付蓋

図版22　145　Ｂ区出土染付皿　147・152　Ｂ区出土染付碗　149～151　Ｂ区出土高脚杯

図版23　157～160　Ｂ区出土白磁碗　161～163　Ｂ区出土白磁皿　164・165　Ｂ区出土白磁小杯　167・168　Ｂ区出土白磁蓋・壺　189・190　Ｂ区出土陶器碗

図版24　287 C区出土染付碗 285・286・288 C区出土染付皿 290 D区出土染付碗 302・303 G区出土染付碗

図版25　15～17・19・21・24 B区出土軒丸瓦

図版26　25・26・29・233 B区出土軒丸瓦 281・282 C区出土軒丸瓦

図版27　234～238 B区出土軒丸瓦 284 C区出土軒丸瓦

図版28　30～32・34・37～45・242・244 B区出土軒平瓦

図版29　57 B区出土軒平瓦 59・60 B区出土平瓦 247 B区出土雁振瓦 248～250 B区出土丸瓦

図版30　50～55 B区出土丸瓦

図版31　61・62 B区出土鳥衾 251 B区出土道具瓦 254 B区出土鬼瓦

図版32　255～257 B区出土文字瓦

図版33　258～265 B区出土石製品

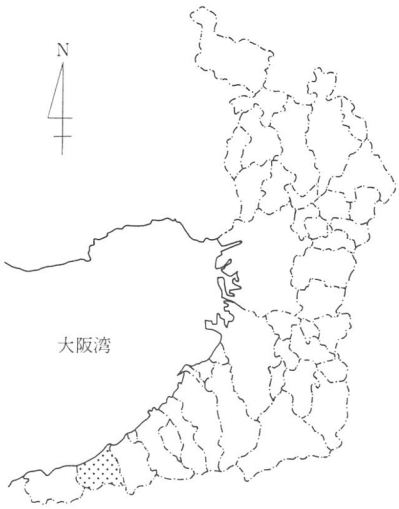
図版34　266・267 B区出土石製品 296～299 F区出土石製品 305・306 G区出土石製品

図版35　268～272・274 B区出土石製品

図版36　273・275～280 B区出土石製品

第Ⅰ章　調査に至る経過

関西国際空港建設の埋め立て用土砂採取地のひとつとして大阪府泉南郡阪南町南部の丘陵地帯が選定され、当該地域の文化財調査の必要性が生じた。そのため大阪府教育委員会文化財保護課は、昭和60年７月大阪府企業局地域整備部内陸整備課と協議を行った。その結果に基づいて大阪府教育委員会は財団法人大阪府埋蔵文化財協会に分布調査の実施を指示した。この協議の趣意に従って、同年９月、企業局と大阪府埋蔵文化財協会との間に文化財調査の委託契約が結ばれ、９月26日より調査準備に取り掛かり、10月８日から11月20日の期間で土砂採取事業範囲を中心に分布調査を実施した。この分布調査によって、土砂採取事業範囲内で21箇所の遺跡、遺物散布地および石造物等の存在を確認するに至った。[1]



第１図　阪南町位置図

この成果を受けて、工事に直接影響をきたす金剛寺遺跡を含む７遺跡の試掘調査を計画し、昭和61年５月企業局と協会の間にその実施に関する委託契約が締結され、同年６月２日から現地における試掘調査を開始し、12月25日完了した。金剛寺遺跡の調査地は、阪南町貝掛の釈迦坊川によって形成された開析谷部分で、１号進入路及び釈迦坊川沈砂池等の予定地である。試掘調査の結果、谷部のトレンチでは遺物は無いかごく少量で遺構も検出できなかったが、釈迦坊川左岸の段丘上の各トレンチから瓦、土師器、瓦器等を検出することができた。また周辺には「金剛寺」という地名が残り寺院の存在が伝承されていることと併せて検討すると、この段丘上に寺院遺構が存在すると想定された。[2]

以上の成果を総合し、新たに昭和62年１月、企業局と協会の間に金剛寺遺跡の発掘調査に関する委託契約が締結され、同年２月16日に着手し同年５月25日をもって終了した。

(1) ㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第３輯『関西国際空港建設に伴う阪南町内埋蔵文化財分布調査報告書』1985．11．30

(2) ㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第９輯『関西国際空港建設に伴う阪南丘陵埋蔵文化財試掘調査報告書』1987．１．10

第II章　立地と環境

大阪府泉南郡阪南町の位置する泉南地域は、和泉山脈より丘陵及び洪積段丘高位面が派生し、縁辺部には洪積段丘中位面や低位面が形成されている。また、河川の下流には沖積段丘や氾濫原が存在する。

阪南町は、町域の大部分を占める和泉山脈主相部と同前衛山地、男里川によって形成された沖積平野、そして、和泉山脈前衛部西縁にとりつく狭隘な段丘、丘陵部からなる。

和泉山脈主相部、同前衛山地部分の和泉層群は、礫岩、砂岩ないし泥岩のさまざまな厚さの律動的互層で特徴づけられるものである。これらの互層は、東西方向に走向し、南に傾斜する向斜傾向をみせる。ここにみられる砂岩は、中粒から細粒の緑色をおびた淡灰色系の均質なもので、通称「青石」と呼称される硬質のものである。[1]

阪南町域における考古学的知見を概述すると、現在確認されている最古のものは、縄文時代草創期に入る有舌尖頭器などが採集されている蓮池遺跡である。また、男里川に面した丘陵北川縁辺部に位置する玉田山遺跡・寺田山遺跡・岩崎山遺跡・石田山遺跡でも石鏃などが採集されており、縄文時代に属する遺跡であると推定されている。しかし、いずれも土器が知られておらず詳細は不明である。

弥生時代では、神光寺遺跡で中期の方形周溝墓の存在が確認されているのみで、[2]集落などの様相は不明である。しかし、蓮池遺跡・三味谷遺跡・田山遺跡・三升五合山遺跡で中期から後期にかけての土器、石器などが認められており、今後の調査によって明らかにされていくものと考える。周辺では、泉南市男里川流域の男里遺跡が弥生時代の集落遺跡として知られている。[3]

古墳時代では、蓮池遺跡や田山遺跡で土器などが認められるのみで、弥生時代同様、集落などの様相は不明である。

一方、古墳では、中期に入るものと推定される全長38mの帆立貝形古墳、箱作古墳が初現のものと考えられている。本墳は、茶屋川左岸段丘上に位置したもので、すでに消滅しており、残念ながらその詳細は不明である。古墳の築造は、箱作古墳以降若干の空白期が介在し、後期後半になって玉田山古墳群・塚谷古墳群・高田山古墳群が形成されている。

これらの古墳群は、いずれも数基から構成される小規模なもので、横穴式石室、箱式石棺の混在や小竪穴式石室が認められ、周辺地域の後期古墳の動向とよく符合するものとい

1	天神ノ森遺跡	11	神光寺（蓮池）遺跡	21	箱作今池遺跡
2	男里遺跡	12	三昧谷遺跡	22	飯ノ峯畑遺跡
3	光平寺跡（光平寺石造五輪塔）	13	石田山遺跡	23	稲丸遺跡
4	平野寺（長楽寺）跡	14	井関遺跡	24	井山城跡
5	高田山古墳群	15	三升五合山遺跡	25	箱作ミノバ石切場跡
6	幡代遺跡	16	師道谷遺跡	26	箱作古墳
7	皿田池古墳	17	貝掛遺跡	27	茶屋遺跡
8	自然田遺跡	18	塚谷第１、第２、第３号墳	28	箱作仏屋谷石切場跡
9	玉田山古墳群	19	金剛寺遺跡	29	箱作細谷石切場跡
10	岩崎山遺跡	20	四郎太郎遺跡	30	田山遺跡

第２図　周辺遺跡分布図

える[4]。また、海浜部では、製塩土器、蛸壺などが採集されており、この部分についても今後の解明がまたれる。

奈良時代には、田山遺跡においてまとまった遺物が出土しており[5]、集落の存在を裏づけるものと考えられる。また、寺院址については、平安時代に入り長楽寺、平野寺などの出現をみるが、現在のところ奈良時代に遡るものは知られていない。

平安時代以降、筥作荘、鳥取荘の二荘が立てられている。前者は、上加茂神社領、後者は、観心寺領あるいは皇室領といわれ、室町時代には伊勢神宮領となっているもので、中世以降の採集資料の増加がこれを裏づけるものと思われる。また、南北朝時代には、北朝に属する淡輪助重が井山城を拠点にしてこの争乱に加わっていたことが知られている。

一方、紀伊にあっては、中世以降、根来寺、下って本願寺の後楯となる雑賀一向衆が大きな力をもち、これに対する諸勢力が阪南町域を行きかい、この地が政治的・経済的・軍事的・交通の拠点として重要な役割を果たしている。

近世に入り、阪南町域のもつ大きな特質のひとつとして、「箱作」の地名が示すように、和泉砂岩の採石があげられる。

和泉砂岩の採石は、『新撰姓氏録』に記載されている和泉石作連、堺市二本木山古墳の割竹形石棺、同乳の岡古墳の長持形石棺の一部に和泉砂岩が使用されているといわれ、また、日葉酢媛陵の石棺製作伝承などから、石工の活動が比較的古くまで遡るものと考えられる。しかし、西日本を中心とした和泉砂岩の石工の移動は、近世に入ってからのものとみられ、墓石・燈籠・鳥居・石柱・石臼・建築資材をはじめとする各種石造品が箱作、尾崎の港から搬出されている。このような販路の拡大は、必然的に生産拡大に拍車を掛けたようで、黒田村、新村、貝掛村などを中心に大規模な石切りが行われ、これにともなう洪水の誘発などに関する多くの争議文書が残されている[6]。

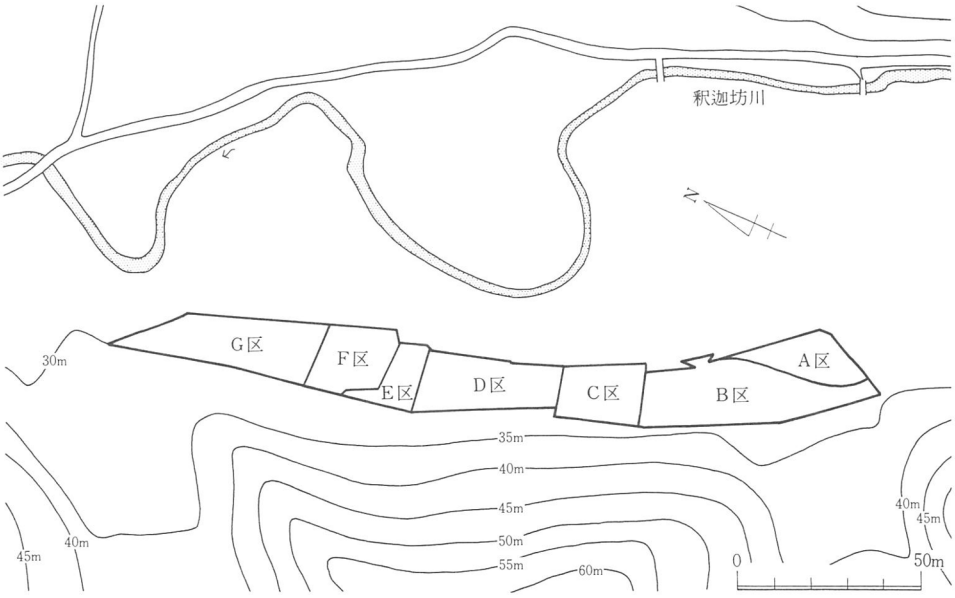
以上、阪南町域の考古学的知見を中心に概要を述べてきたが、いまだ不明な点が多く残されており、解決されなければならない問題も多岐にわたる。今後の阪南町域の詳細な調査がまたれる。

(1) 『岸和田市史』1981.市原実・市川浩一郎・山田直利『岸和田地域の地質』(『地域地質研究報告』)1986
(2) 阪南町教育委員会『神光寺跡発掘調査報告書』1982
(3) 泉南市史編纂委員会編『泉南市史　史料編』1982
(4) 西山要一『淡輪磯山古墳群』1980
(5) ㈶ 大阪文化財センター『田山遺跡』1983
(6) 阪南町史編纂委員会編『阪南町史』1983

第Ⅲ章　調 査 の 方 法

地区名の呼称と略号

調査および本書の中で用いた調査区の地区設定・遺構名・遺構の種類等の略号は本協会が定めた発掘調査規程に基づいて実施した。調査では、国土座標法による新平面直角座標第Ⅵ座標系をもとに４×４ｍの最小区画割りを用いた。地区割りの基本は大阪府発行新版（昭和59年建設省国土地理院承認）の1/2,500の地形図である。この地図を12等分して500ｍの方形区画を作り、この区画にＡ～Ｌまでの記号を付ける。次に、この区画を25等分して100ｍの方形区画を作る。100ｍ区画には北西隅から東へ01～25の番号を与え、さらに100ｍの方形区画を625等分して４ｍ四方の区画を作る。これによって出来た縦方向25行、横方向25列の４ｍ区画は２文字のアルファベットでＡＡ、ＡＢと表現している。また、区画表示の際は縦方向を優先している（第４図参照）。今回の金剛寺遺跡調査区はこれによると大Ｂ－２－５－Ｋの中の16・17・21・22の100ｍの区画内に位置している（第４図）。主に遺構説明の項で用いた１－ＯＺ等の表現は、遺構名（アラビア数字＝１）と遺構の種類（アルファベット＝ＯＺ）を示している。遺構名の数字に関しては、例えば掘立柱建物のように複数のピットからなる遺構以外重複することはない。遺構の種類は本協会で定めた



第３図　地区割模式図

略号を用いており、本書に関係する略号の意味は次のとおりである。

建物	ＯＢ	炉	ＯＨ	水利施設	ＯＩ		
土壙	ＯＯ	ピット	ＯＰ	溝	ＯＳ	瓦溜	ＯＴ
井戸	ＯＷ	田畑	ＯＺ	その他・不明	ＯＸ		

調査の方法と概要

調査は現代耕土を機械掘削によって除去し、それから下層については人力によって掘り下げた。調査地の地目はいずれも、畑、水田、である。

今回の調査区は釈迦坊川左岸の段丘上に位置している。調査直前の標高は、北側でＴ．Ｐ＋29.5m、南側でＴ．Ｐ＋33.7m前後であった。この地区における既往の調査は分布調査[(1)]および試掘調査[(2)]（今回の調査区ではＢ区・Ｃ区に当たる。）しかなされていないため、遺構の広がりなどについては不明な点が多い。したがって、まず現代耕土を除去し、調査区の東側に側溝を掘削し、土層を観察しながら人力掘削をおこなった。また、遺構には、随時土層観察用の畦を設定した。

平面図の実測は、４×４ｍの方区画の交点杭から位置、方位の決定を行い、縮尺は１：20を基調とした。また、全体図を航空写真測量でおこない、１：20、１：100の図を作成した。土層断面図の実測は、平面図と対応させるべく１：20を基調とした。

写真撮影は、35㎜一眼レフ小型カメラ、６×７㎝中型カメラを併用して撮影した。また、フィルムは、カラースライド、モノクロームを使用し、５段２連の足場を４ケ所設置し、撮影の補助とした。その他、写真としては航空測量用フィルムを使用し、モザイク写真（１：100）のパネルを作成した。

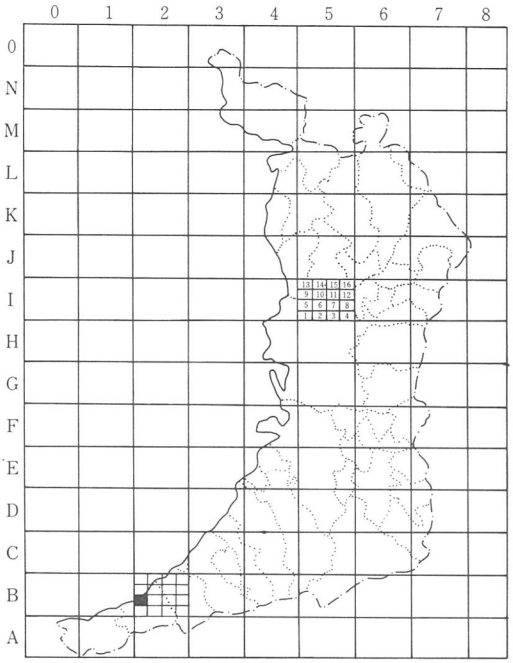
遺物は、地区（４ｍ方区画）・層位・年月日・遺物登録番号などを記入したカードとともに取り上げた。

今回の調査地は、段状の水田、畑地として利用されており、大きく７つに分かれている。

従って、記述の都合上便宜的に、この７分割された南側から順にＡ～Ｇ区の区分けを用いている（第３図参照）。

(1) ㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第３輯『関西国際空港建設に伴う阪南町内埋蔵文化財分布調査報告書』1985．11．30

(2) ㈶大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第９輯『関西国際空港建設に伴う阪南丘陵埋蔵文化財試掘調査報告書』1987．１．10



大阪府地域計画図の図割

500m

A	B	C	D
E	F	G	H
I	J	K	L

500m の区画

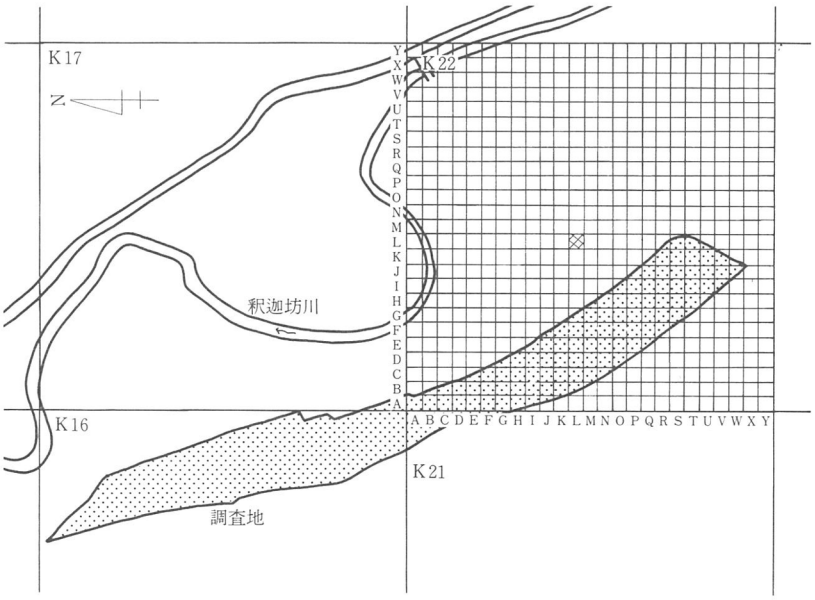
100m

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

100m の区画

(例)　大B－2－5　K　22　LL

地形図の標題　500m　100m　4 m



第４図　調査区地区割図

第Ⅳ章　調 査 の 成 果

第１節　層序

金剛寺遺跡は阪南町貝掛の釈迦坊川によって形成された開析谷部分で、調査地は釈迦坊川左岸の丘陵に沿う段丘上に位置する。谷は南から北にのびており、調査開始時点では段状の水田および畑地として利用されていた。また、調査区は後世の整地などによって、複雑な堆積過程を経ていた。従って、調査区全体の基本的な層序を述べることはむずかしいので、調査区（第３図参照）に分け、それぞれについて説明する。

調査区の標高は南端でＴ．Ｐ＋33.7ｍ、北端でＴ．Ｐ＋29.0ｍを測る。層序は基本的には、上層より耕作土、床土、包含層、地山の順で堆積していた。地山については黄色シルト質が主であるが、Ｃ区などの一部には砂礫を含むものも存在した。層序は第５・６図に示した。

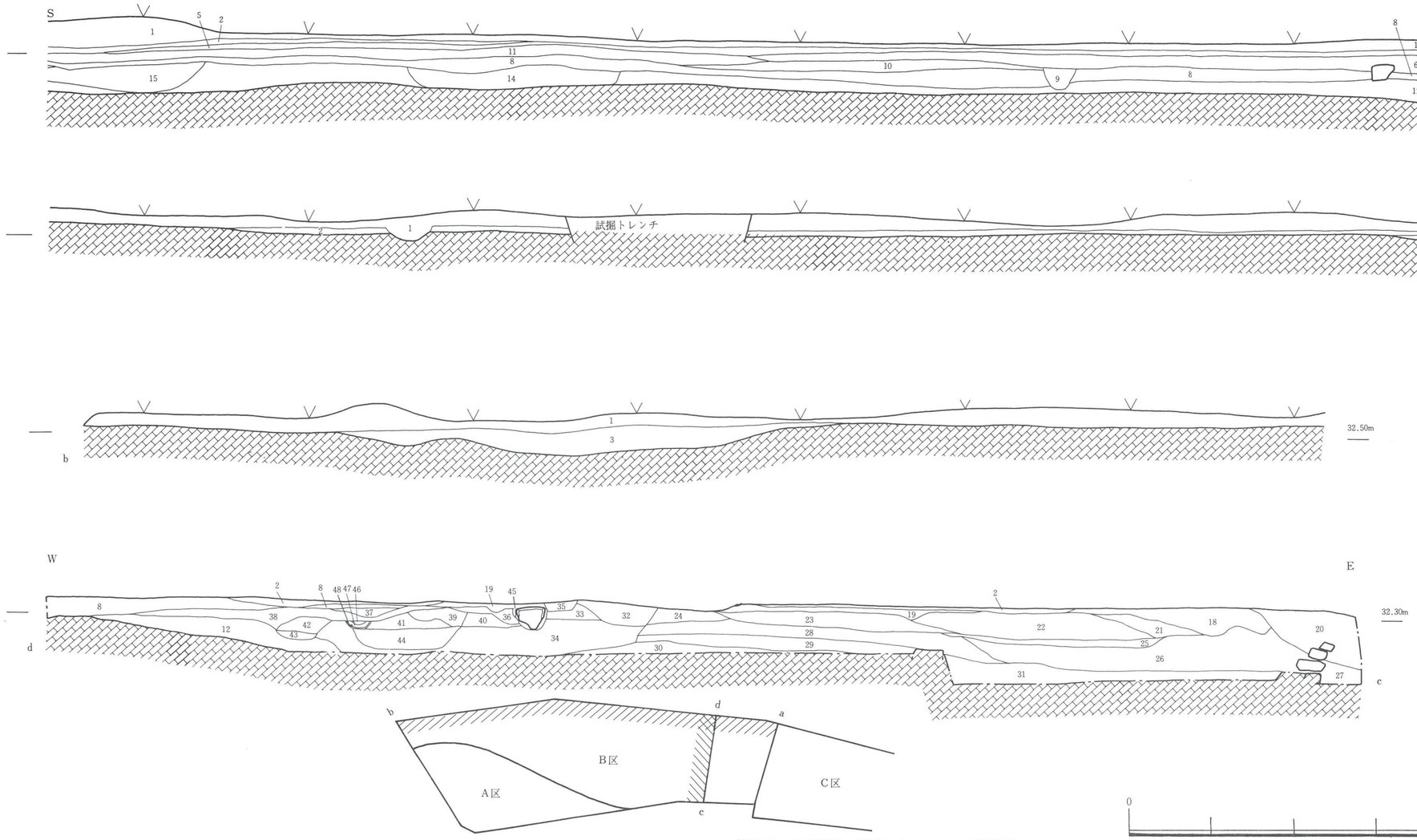
Ａ～Ｃ区の東側は谷状地形による為、堆積が希薄である。従って堆積状況の良好な西側の壁において土層図を作成した。またＤ～Ｇ区においては、東側の壁の方が西側に比べて堆積状況が良好であったので、東側の壁において土層図を作成した。

Ａ区においては耕作土及び薄い床土を除去しただけで地山となったので、土層図は示していない。

Ｂ区は、南より約30ｍまでは、Ａ区と同様耕作土と床土を除去後すぐ地山となった。しかし、それより北側では、厚さ５～10㎝程度の層が繰り返し堆積する複雑な状況を示していた。おそらく中世から近世にかけて、整地と削平が何度も繰り返し行われたものと考えられる。しかし、遺構面としてとらえられたのは、中世の整地土上における100－ＯＢ検出面と地山直上で検出した遺構群のみであった。

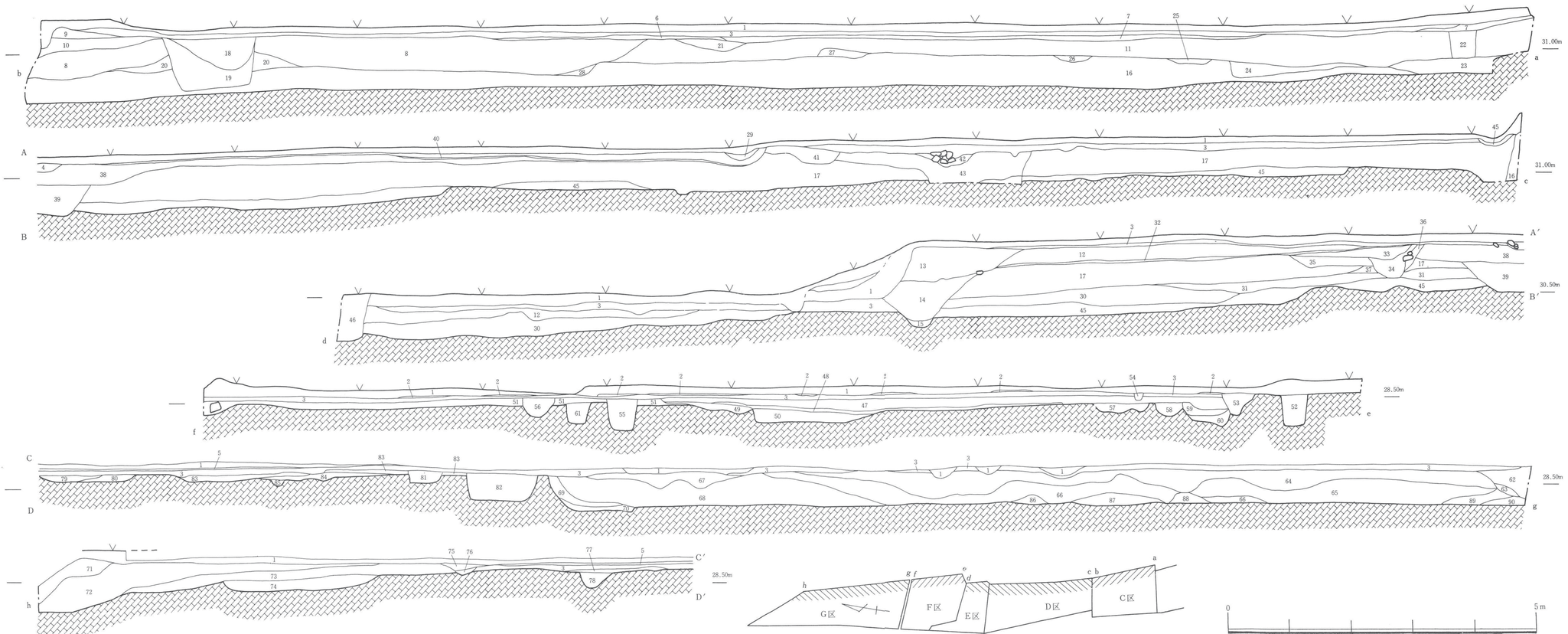
Ｃ区においては、近世整地土除去後107－ＯＢを検出する遺構面を認めた。この遺構が構築されている整地土からは中世の遺物のみを検出した。この中世の整地土はＣ区よりＤ区にかけて認められた。なおＣ区においてはこの層は東側の谷側が約50㎝と厚く、西側では約５㎝と薄い堆積状況であった。

Ｄ区では東側で約30㎝を測るが、調査区の東半分のみの堆積であった。Ｃ～Ｄ区にかけてこの層を除去すると地山となった。



1．2.5Y3/3(暗オリーブ褐)砂質土(耕作土)
2．10YR5/6(明黄褐)粗砂混シルト(床土)
3．10YR5/6(明黄褐)粘土
4．2.5YR4/4(オリーブ褐)砂質土
5．10YR5/6(にぶい黄褐)粗砂混シルト(床土)
6．10YR5/6(明黄褐)粗砂混シルト)(中礫・瓦片を少量含む)
7．10YR5/6(黄褐)粗砂混シルト(大礫・瓦片を少量含む)
8．10YR5/6(黄褐)砂質土(中礫・瓦片を少量含む)
9．10YR5/6(にぶい黄褐)砂質土(瓦片を少量含む)
10．10YR5/6(明黄褐)粗砂混シルト
11．10YR5/6(明黄褐)粗砂混シルト
12．10YR5/6(黄褐)粗砂混シルト
13．10YR5/6(明黄褐)粗砂混シルト(小礫を少量含む)
14．10YR5/6(黄褐)細砂混シルト(礫・瓦片をやや多量に含む)
15．2.5Y5/4(黄褐)砂質土(小礫を多く含む)
16．2.5Y4/4(オリーブ褐)砂質土
17．10YR5/6(黄褐)シルト
18．10YR5/6(黄褐)シルト
19．10YR5/6(明黄褐)シルト
20．10YR5/6(黄褐)砂質土(礫を含む)
21．10YR5/6(明黄褐)シルト(礫を少量含む)
22．10YR5/4(にぶい黄褐)砂質土(瓦をやや多く含む)
23．10YR5/4(褐)砂質土(瓦を多量に含む)
24．10YR5/6(灰黄褐)シルト(瓦を少量含む)
25．10YR5/6(黄褐)砂質土
26．10YR5/4(褐)砂質土(瓦・礫をやや多く含む)
27．10YR5/6(黄褐)砂質土(礫を少量含む)
28．10YR5/6(明黄褐)シルト
29．10YR5/6(明黄褐)粗砂混シルト
30．2.5Y5/4(浅黄)砂質土
31．10YR5/6(黄褐)粗砂混シルト(細かい礫を多量に含む)
32．10YR5/6(灰黄褐)砂質土(瓦を含む)
33．10YR5/6(明黄褐)シルト
34．10YR5/6(明黄褐)粗砂混シルト
35．10YR5/4(褐)砂質土(瓦を少量含む)
36．10YR5/6(黄褐)粗砂混シルト
37．10YR5/6(明黄褐)シルト
38．10YR5/4(褐)砂質土
39．10YR3/4(黒褐)砂質土(焼土・瓦・壁土・炭を多量に含む)
40．10YR5/6(黄褐)粗砂混シルト
41．10YR5/4(褐)粗砂混シルト
42．10YR3/3(暗褐)砂質土(礫をやや多く含む)
43．10YR5/6(明黄褐)シルト
44．10YR5/6(黄褐)シルト(小礫を多く含む)
45．10YR5/4(褐)砂質土
46．10YR5/4(褐)砂質土
47．10YR5/6(黒褐)焼土(かたくしまる)
48．5YR5/4(赤褐)焼土

第５図　Ｂ区西壁・東西セクション土層断面図



1．現代耕土
2．旧耕土
3．床土　シルト
4．2.5Y⅖(明灰黄)細砂混シルト
5．10YR⅝(灰黄褐)砂質土
6．2.5Y⅖(淡い黄)シルト
7．10YR⅝(にぶい黄橙)シルト
8．10YR⅞(明黄褐)粗砂混シルト
9．10YR⅞(明黄褐)粗砂混シルト
10．10YR⅝(灰黄褐)粗砂質土
11．10YR⅞(黄褐)粗砂混シルト
12．10YR⅞(黄褐)弱粘質シルト (小礫含む)
13．10YR⅞(黄褐)粘質シルト
14．5YR⅖(褐灰)粘質シルト
15．5YR⅖(褐灰)小礫混粘質シルト
16．2.5Y⅝(オリーブ褐)砂質土
17．10YR⅞(にぶい黄褐)砂礫混シルト
18．10YR⅞(明黄褐)粗砂混シルト
19．10YR⅝(褐)粗砂質土(礫多量に含む)
20．10YR⅞(黄橙)粗砂混シルト
21．7.5YR⅝(にぶい褐)砂礫土
22．10YR⅝(にぶい黄褐)シルト (礫・瓦を少量含む)
23．10YR⅝(黄褐)シルト(礫を多量に含む)
24．10YR⅝(灰黄褐)砂質土 (礫・瓦を少量含む)
25．10YR⅝(にぶい黄褐)砂質土
26．10YR⅞(灰黄褐)シルト
27．2.5Y⅖(淡い黄)シルト(焼土・炭含む)
28．2.5Y⅝(黄)シルト
29．2.5Y⅝(暗灰黄)シルト
30．7.5YR⅝(褐灰)弱粘質シルト (小礫少量含む)
31．2.5Y⅝(にぶい黄)弱粘質シルト
32．2.5Y⅝(暗灰黄)粘質シルト (礫を少量含む)
33．2.5Y⅝(にぶい黄)弱粘質シルト (小礫を多量に含む)
34．10YR⅞(黒褐)シルト
35．2.5Y⅝(暗灰黄)粗砂混シルト
36．2.5Y⅝(淡黄)粘質シルト
37．10YR⅝(灰黄褐)粗砂混シルト
38．2.5Y⅞(明黄褐)弱粘質シルト (小礫を多量に含む)
39．10YR⅝(にぶい黄橙)粘質シルト (砂礫を多量に含む)
40．2.5Y⅝(黄灰)シルト
41．2.5Y⅝(暗灰黄)細砂混シルト
42．2.5Y⅞(明黄褐)粘質シルト
43．2.5Y⅝(黄褐)弱粘質シルト (小礫を含む)
45．10YR⅝(にぶい黄褐)粗砂混シルト
45．2.5Y⅝(淡黄)粘質シルト(砂礫を含む)
46．盛土
47．10YR⅝(灰黄褐)シルト
48．10YR⅞(褐灰)砂質土(旧耕土？)
49．10YR⅝(明黄褐)シルト
50．10YR⅝(黒褐)砂質土 (礫を多量に含む)
51．10YR⅞(褐灰)砂質土
52．10YR⅝(にぶい黄褐)粗砂混シルト (暗渠排水溝)
53．10YR⅝(黄橙)シルト(礫を多く含む)
54．10YR⅝(灰黄褐)シルト
55．10YR⅝(黄褐)砂質土
56．10YR⅝(黄褐)砂質土
57．10YR⅝(にぶい黄橙)シルト
58．10YR⅞(褐灰)シルト
59．10YR⅞(褐灰)粘土
60．10YR⅞(灰白)砂質土
61．10YR⅝(灰黄褐)シルト
62．10YR⅝(黄褐)粗砂混シルト
63．10YR⅝(明黄褐)粗砂混シルト
64．10YR⅝(にぶい黄褐)粗砂混シルト
65．10YR⅝(褐)砂質土(礫を少量含む)
66．10YR⅝(黄褐)砂質土
67．10YR⅝(黄褐)粗砂混シルト
68．10YR⅝(黄褐)粗砂混シルト (礫を少量含む)
69．10YR⅝(灰黄褐)砂質土
70．10YR⅝(にぶい黄褐)シルト
71．10YR⅝(灰黄褐)砂質土
72．7.5YR⅝(橙)シルト
73．10YR⅝(黄褐)砂質土
74．10YR⅝(黄褐)粗砂混シルト
75．10YR⅝(灰黄褐)砂質土
76．7.5YR⅝(黄橙)砂質土
77．10YR⅝(褐)シルト
78．10YR⅝(褐)砂質土(炭を少量含む)
79．10YR⅝(にぶい黄橙)シルト
80．10YR⅞(黒褐)砂質土(炭を少量含む)
81．10YR⅝(褐)砂質土(炭を少量含む)
82．10YR⅝(褐)砂質土(炭を少量含む)
83．10YR⅝(にぶい黄褐)シルト
84．10YR⅝(にぶい黄褐)砂質土 (焼土を多量に含む)
85．10YR⅝(にぶい黄褐)砂質土
86．10YR⅝(にぶい黄褐)シルト
87．10YR⅝(明黄褐)砂質土
88．10YR⅝(にぶい黄褐)粗砂混シルト
89．10YR⅝(黄褐)シルト
90．10YR⅝(にぶい黄褐)シルト

第６図　Ｃ～Ｇ区東壁土層断面図

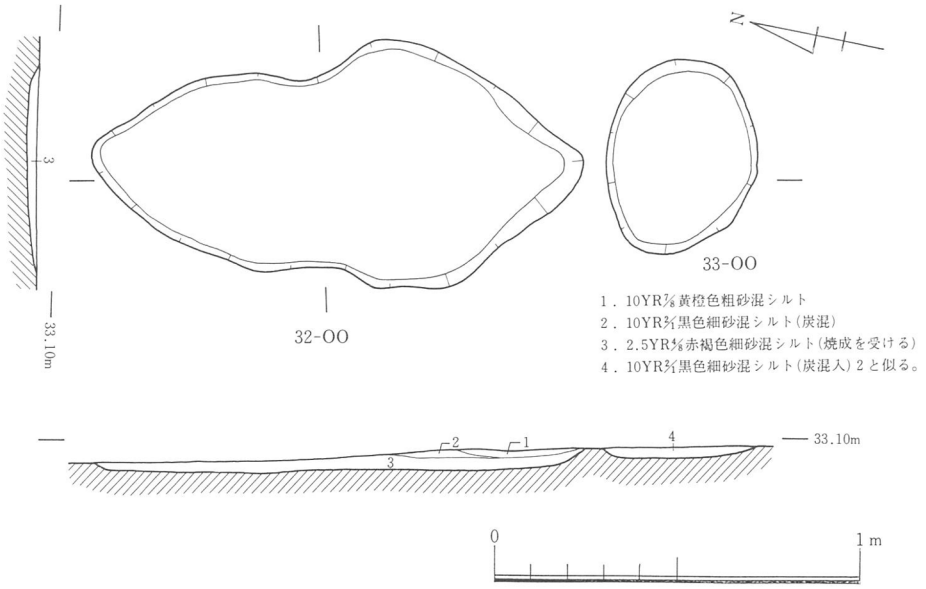
第２節　中世の遺構と遺物

今回の調査において中世の遺構造物はＢ区においてのみ検出することができた。検出した遺構は礎石建物、石積み遺構、石列、土壙、溝などであるが、いずれも近～現代の削平などを受けている。また、遺物も遺構に伴うものは少なかった。なお、中世の遺構面のレベルは、32.0～33.0mであった。

32・33－ＯＯ　（第７図）

Ｂ区のＫ－22ＮＤ・ＯＤ地区において検出した焼土壙である。32－ＯＯの平面形は不整形で、長軸2.7m、短軸1.3m、深さ５㎝前後を測る。埋土は、10ＹＲ7/8黄橙色粗砂混シルト、10ＹＲ2/1黒色細砂混シルト（炭混）、2.5ＹＲ4/8赤褐色細砂混シルト（焼成を受ける）の３層である。33－ＯＯの平面形は不整円形を呈する。径約0.9m、深さ３㎝前後を測る。

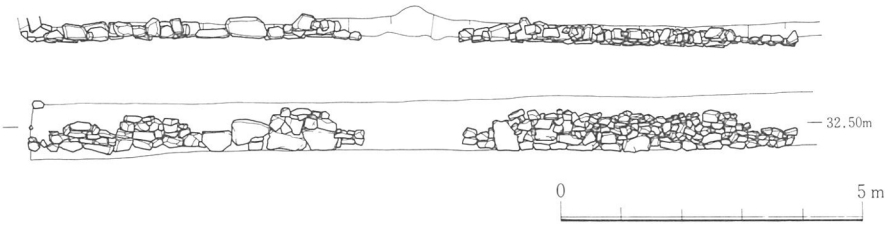
埋土は、10ＹＲ2/1黒色細砂混シルト（炭混入）の１層である。32・33－ＯＯとも上部構造は、後世の削平のため不明であるが、両土壙の位置、埋土から一連の遺構である可能性も考えられる。瓦器碗の小片が出土している。



第７図　32・33－00平面図・断面図

78－ＯＸ　（第８図、図版６）

Ｂ区北端のＫ－22ＪＢ～ＪＥ・ＩＥ地区にまたがって位置する石積み遺構である。石積みは調査区内を東～西方向に走る。中央部および上部は近～現代の削平等によって破壊されているが、石積みの残存部の長さ14m、高さ0.7m前後を測る。石積みの最下段には、長径30㎝前後の石が側面を揃えて並べられている。また、石積みは部分的に積み方が違っており、何度かの積み替えが考えられる。



第８図　78－ＯＸ平面図・立面図

97－ＯＳ　（第11図）

Ｋ－22ＮＨ・ＯＨ地区に位置する。検出長3.8m、幅0.2m前後、深さ５㎝前後を測る。溝は南～北方向に走り、北側を調査区外に延ばす。遺物は出土しなかった。

98－ＯＳ　（第11図）

Ｋ－22ＭＧ地区に位置する。検出長2.5m、幅0.2m前後、深さ８㎝前後を測る。溝は北西～南東方向に走り、両端を調査区外に延ばす。

埋土は10ＹＲ4/4褐色細砂混シルトの１層である。遺物は出土しなかった。

99－ＯＯ　（第11図）

Ｋ－22ＮＧ地区に位置する。平面形は不整方形を呈する。軸長3.8m、深さ約0.25mを測る。

埋土は10ＹＲ6/8明黄褐色細砂質土の１層である。遺物は、瓦片が出土している。

100－ＯＢ　（第９・10・11図、図版９・14）

Ｋ－22ＫＤ・ＫＥ・ＬＤ・ＬＥ・ＭＤ・ＭＥ地区にまたがって検出した礎石建物跡である。東側は近～現代の削平を受けていると思われ、全容は明らかではない。礎石は南北４箇所３間、東西２箇所２間以上が確認された。

検出された範囲内での規模は南北6.8m、東西3.8mを測る。礎石間は南北1.7～1.8m、東西1.5～1.6mで、南北礎石間よりも東西礎石間の方が若干短い。

方位は南北の礎石でＮ－14°－Ｗである。礎石は長径0.3m前後の偏平な割石を整地した

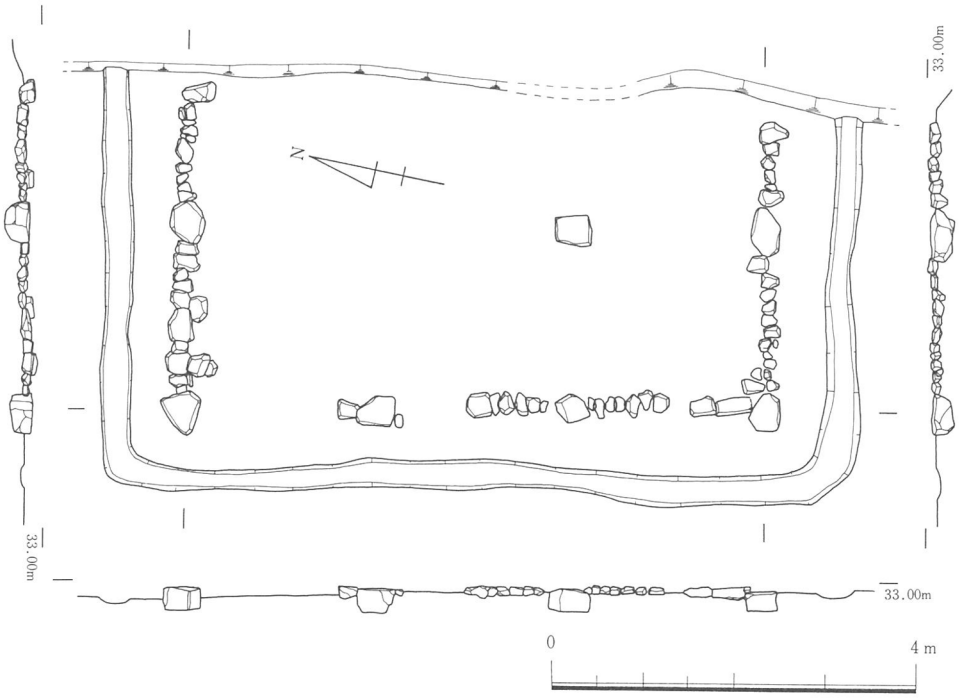
面より堀り込んで置いているが、堀り方は検出することができなかった。

周囲には幅0.4m前後の雨落ち溝をもつ。

遺物は100－ＯＢ内の床面より土師器（１～11)、瓦器（12～14）などが出土した。

（１～11）は土師質の皿であり、口径約14㎝のもの（１～４）と約10㎝のもの（５～８)、また台付のもの（９～11）に分けられる。（１～４）は淡赤褐色を呈し、底部に回転糸切痕を残す。（１）は底部回転糸切痕のうえに板目が観察できる。（５～８）は小皿であり、底部の調整方法により回転糸切のもの（５・６）と指おさえのもの（７・８）に分けられる。（９～11）の台付皿は底部が厚く作られており全て回転糸切痕をもつ。

（12～14）は瓦器である。（12・13）は小碗であり、（12）は器壁は厚く比較的高台もしっかりと作られている。（13）は高台が低く退化しており、器高も低く器壁も薄い。（14）は碗である。器壁は厚く高台もしっかりしている。外面体部にほぼ３段の指頭痕を残し口縁部は強くナデて仕上げている。内面には不明瞭な平行線暗文を認める。

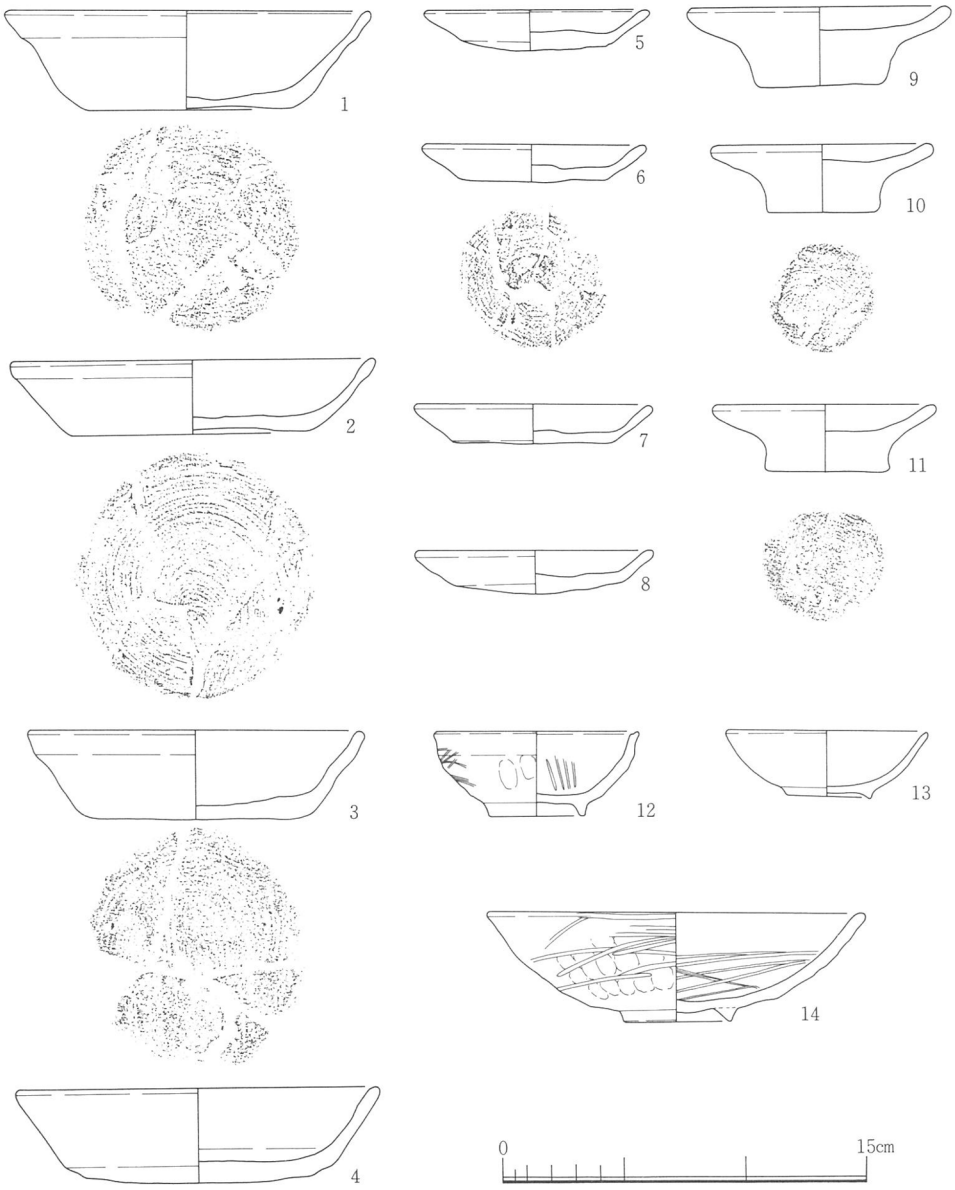


第９図　100－ＯＢ平面図・立面図

106－ＯＸ　（第11図）

Ｋ－22ＬＦ・ＭＦ地区に位置する。調査区内を北東～南西方向に走るが、本来の規模、

形状は両端を削平されているため明らかでない。残存部の長さ３ｍを測る。

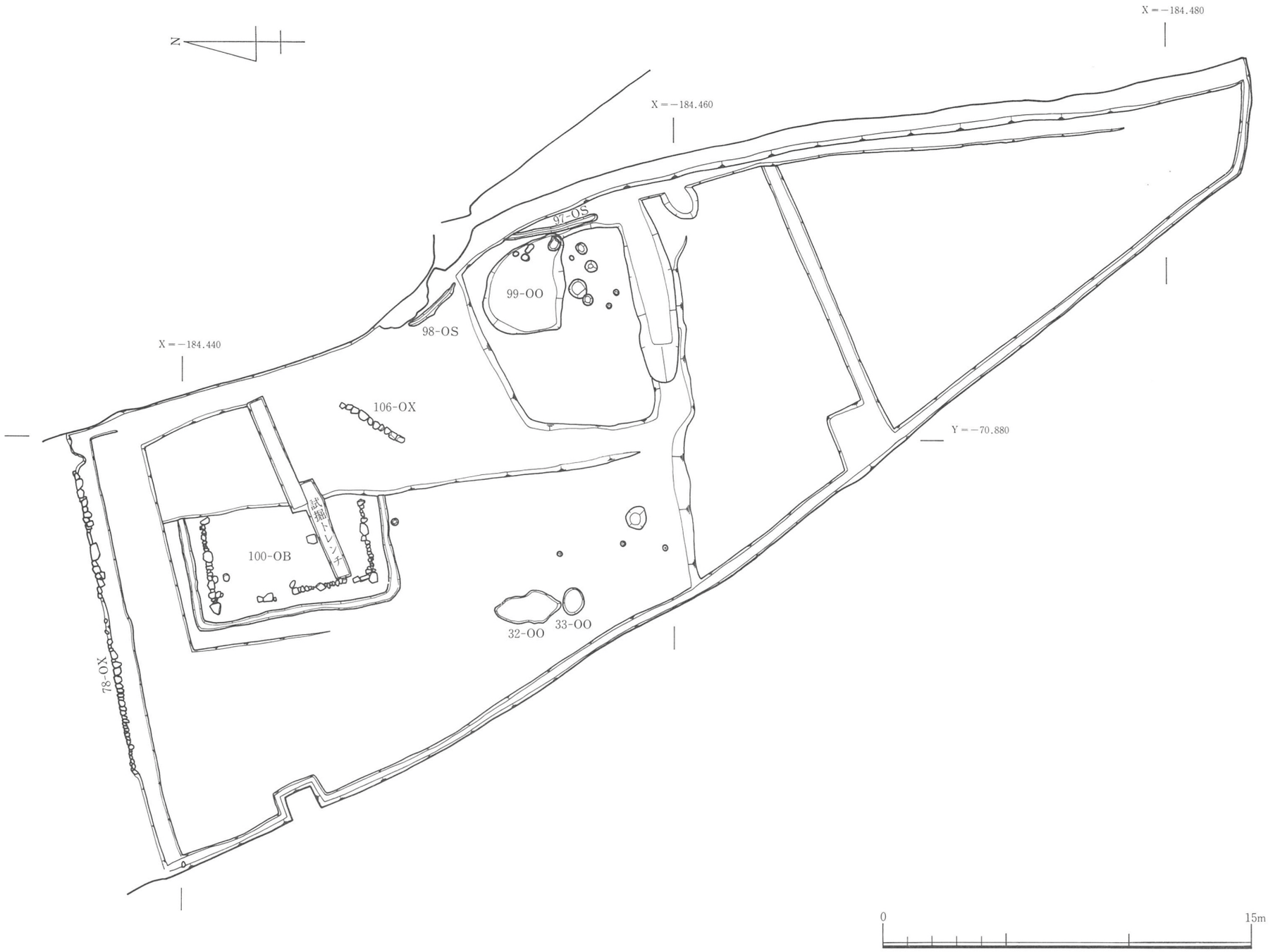


第10図　100－ＯＢ内床面出土遺物

第３節　包含層出土の中世遺物

瓦　（第13～21図、図版25・26・28～31）

主として丸瓦、平瓦がコンテナで約700箱分出土しているが、そのうち中世とおもわれ



第11図　中世遺構平面図

るものは約50箱である。そのほとんどがＢ地区の出土である。

軒丸　（第13・14図、図版25・26）

軒丸の瓦当文様が巴文のものが７種類、複弁式蓮華文のもの３種類、単弁式蓮華文のものが１種ずつの11種類に分類できる。

（15）は複弁式蓮華文を内区文様にもつ。花弁は12単位である。外区には珠文帯を巡らしている。珠文は34単位である。内区中房は偏平で、蓮子は剝離の為、観察難であるが６～７個であろう。焼成はやや悪く、胎土が軟質である。（16）は内区に複弁式蓮華文を６単位配置する。中房内には７単位の珠文を配する。（17～22）は内区文様に複弁式蓮華文を配する。８単位の花弁は平面的であり、中房部分がやや突出し６単位の蓮子を配す。

（23～29）は内区文様に巴文をもつ軒丸瓦である。巴は全て左巻きである。外区の珠文帯の単位で７種類に分類できる。32単位が（23）、28・26・23・22・20・19単位がそれぞれ（25・26・28・29・27・24）に対応する。またＣ地区で８単位の単弁式蓮華文を内区文様とするもの（第55図282）も出土している。

軒平　（第15・16・19図、図版28・29）

瓦当文様により大きく10種類に分類できる。

（30～34・36・37）は蓮珠文である。全て圏線により内区と外区を区画しており、珠文の単位も９個であるが、珠文のタイプにより４種類に分類できる。（30）は珠文が断面半球形を呈し、幅も広い。（31）は珠文が他のものと比べて小さい。（32～34）は珠文がやや偏平で断面は台形を呈する。（36・37）は「２１３１２」の珠文の単位がある。全て周縁は直立縁である。

均正唐草文（35・39・42・57）は文様により、３種類に分類できる。（35）は圏線により内区と外区を区画し、内区に唐草文を描く。また厚いつくりである。（57）は両脇より発した蕨手が９回反転して中心で背向する。（39）は（57）と同様である。（42）はやや粗略化された唐草文のものである。

（38・40）は流水文である。周縁部がやや高い。

波状文（41・43～49）は中心に一子葉を配し、５条の波文を内区全面に描いたもの（41）と４～５条の独立した波文を中心より左右に重ねて９単位配したもの（43～49）がある。

軒平瓦は周縁の特徴により、文様とは別に４種類に分類できる。（39・57）は細い周縁部をもつ。（30～37・42）はそれよりも太い周縁部をもつが両脇と上下の幅が均一である。（38・40・41）は両脇区がやや拡張される。（43～49）は両脇区の拡張がさらに進み、ま

た左右斜上方にも拡張がみられる。

丸瓦　（第17・18・19図、図版30）

全て玉縁のつくタイプである。玉縁の長さで大きく3種類に分類される。

玉縁の長いタイプ（50～52・55・58）は大きいもの（50・51・58）とやや大きいもの（52・55）がある。（50）は凸面はナデ調整を行っているが整形時の縄目痕を残している。凹面は布目痕を残す。玉縁の短いタイプは、（53・54）などがある。

平瓦　（第19・20図、図版29）

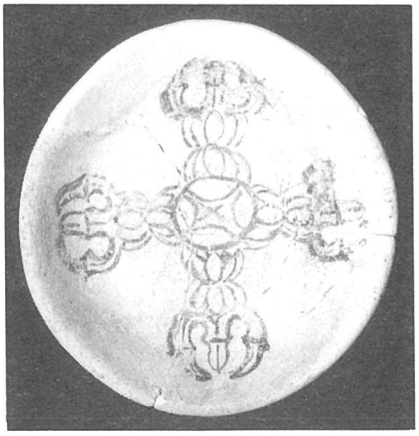
凸面に縄目をもつもの（56・59・60）がある。粗い縄目のもの（56・60）と細かい縄目のもの（59）がある。両方共、凹面には布目を残す。平瓦はこの他に凸面をヘラ状工具でナデて平滑にしているもの（57）などが存在する。

道具瓦　（第21図、図版31）

（61・62・63）は鳥衾である。（61）は内区に左巻きの巴文と外区に17個の珠文を配したものである。周縁部は高いが文様部は平面的である。（62）も（61）同様、内区に左巻きの巴文と外区に24個の珠文を配したもので、周縁部はやや広く、高い。

土師質・瓦質土器・陶磁器類　（第12・22図、図版14・16）

（64～70）は土師質皿である。（64～68）は口径約8㎝の小皿であり、底部は指おさえで調整されている。口縁部を外方に強くナデて端部を肥厚させている。（67・68）は内底部に墨書で十字に三鈷杵を描いている。（69・70）は口径約11㎝を測り底部指おさえで調整される。

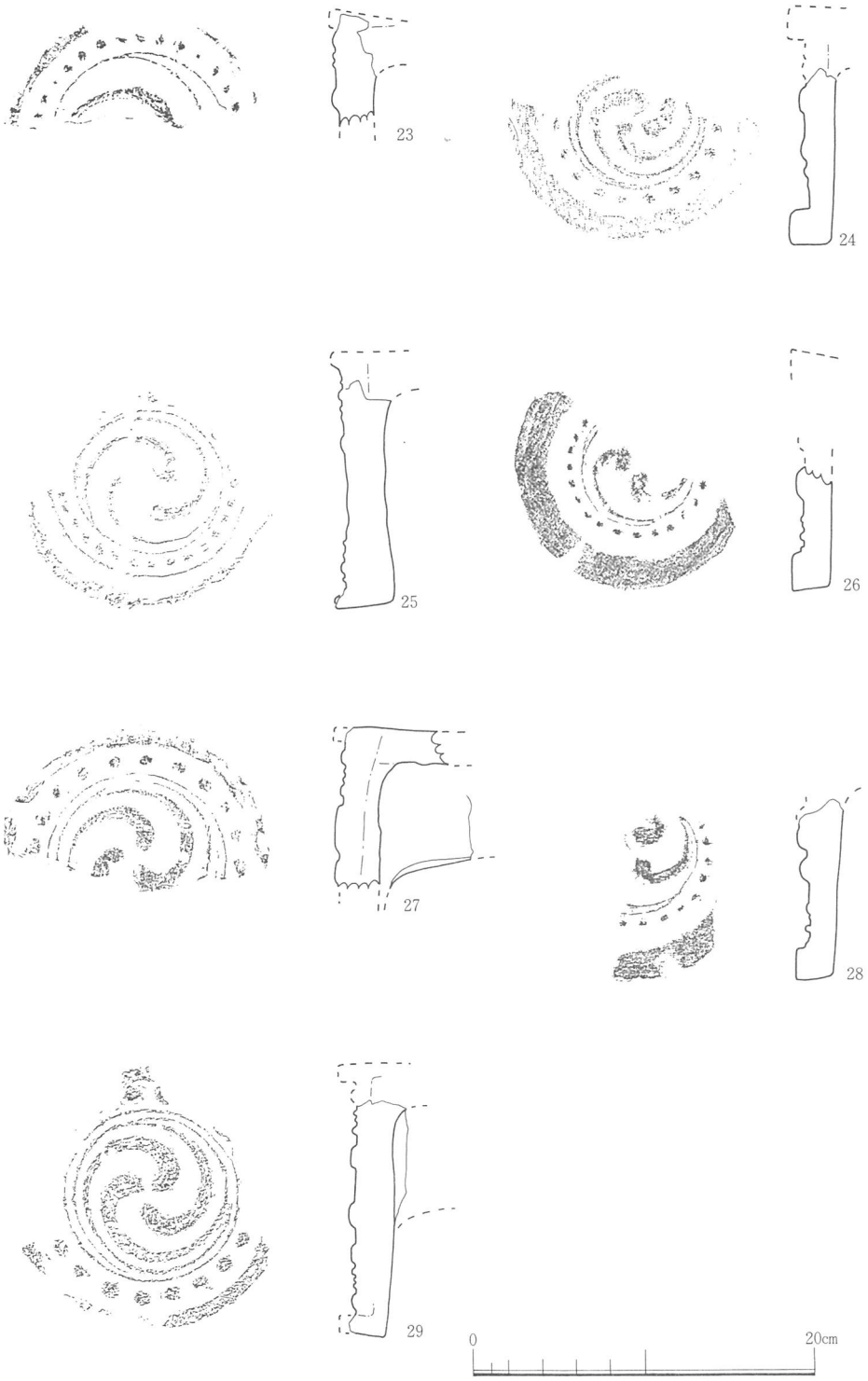


第12図　土師小皿

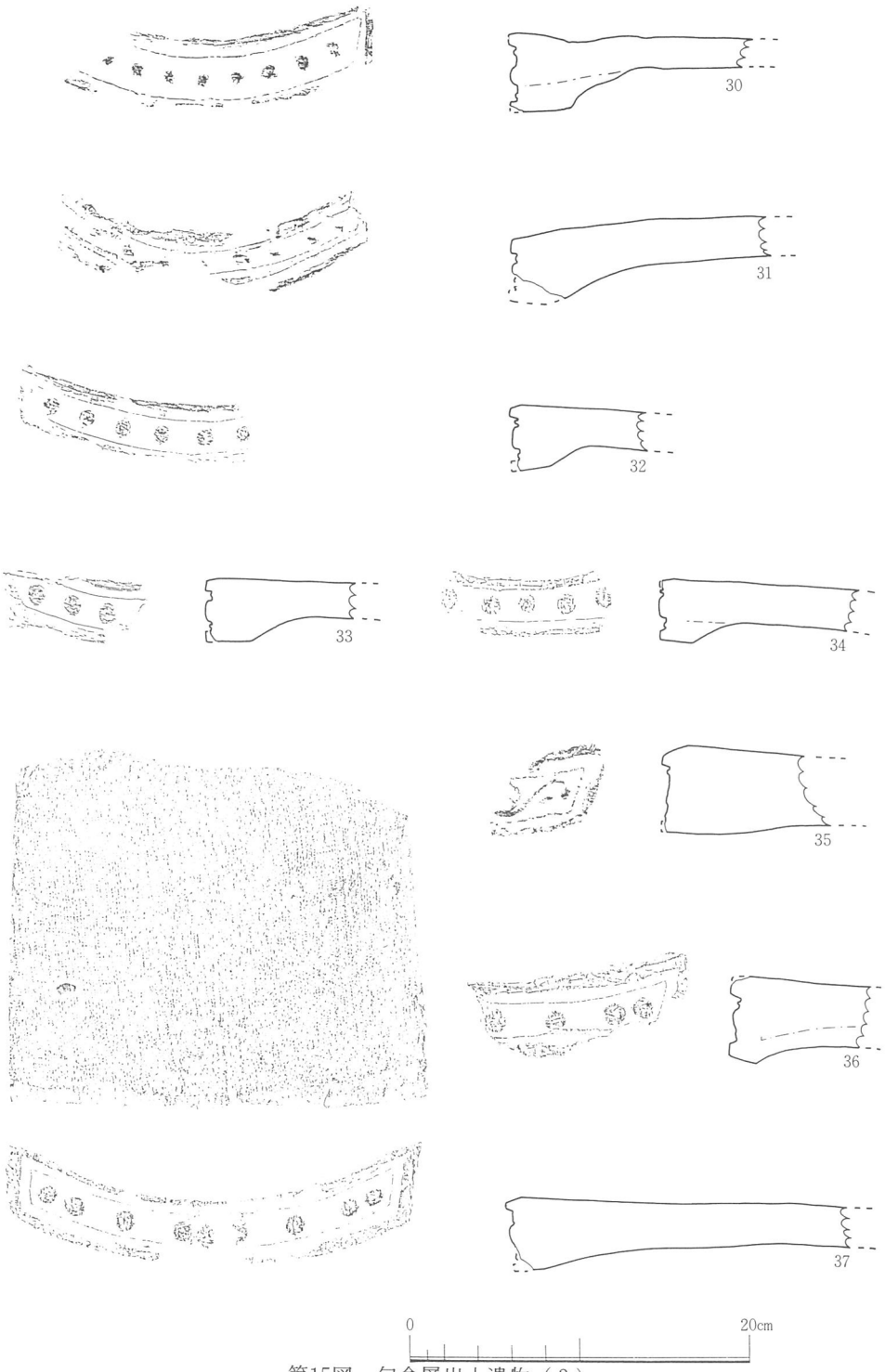
（71～74）は瓦器である。（71～73）は碗であり、（71）は底部を欠損するが、口縁端部が強くヨコナデされ外面体部には指頭圧痕を残す。（72）は器高が低く、高台も粘土紐を貼付けただけの雑なつくりである。外面は不規則な指頭痕を残し、内面は調整不明である。（73）はしっかりしたつくりのものであり、高台端部に面をもつ。内側面に平行線暗文を認める。(74)は小皿であり口縁部を強いヨコナデにより端部を肥厚させている。暗文の有無は不明。

（75・76）は土師質のこね鉢である。内面より口縁部外面までヨコナデで調整し、外面体部をヘラ削りするタイプである。（77・78）は瀬戸焼である。（78）は口縁部が外方へ

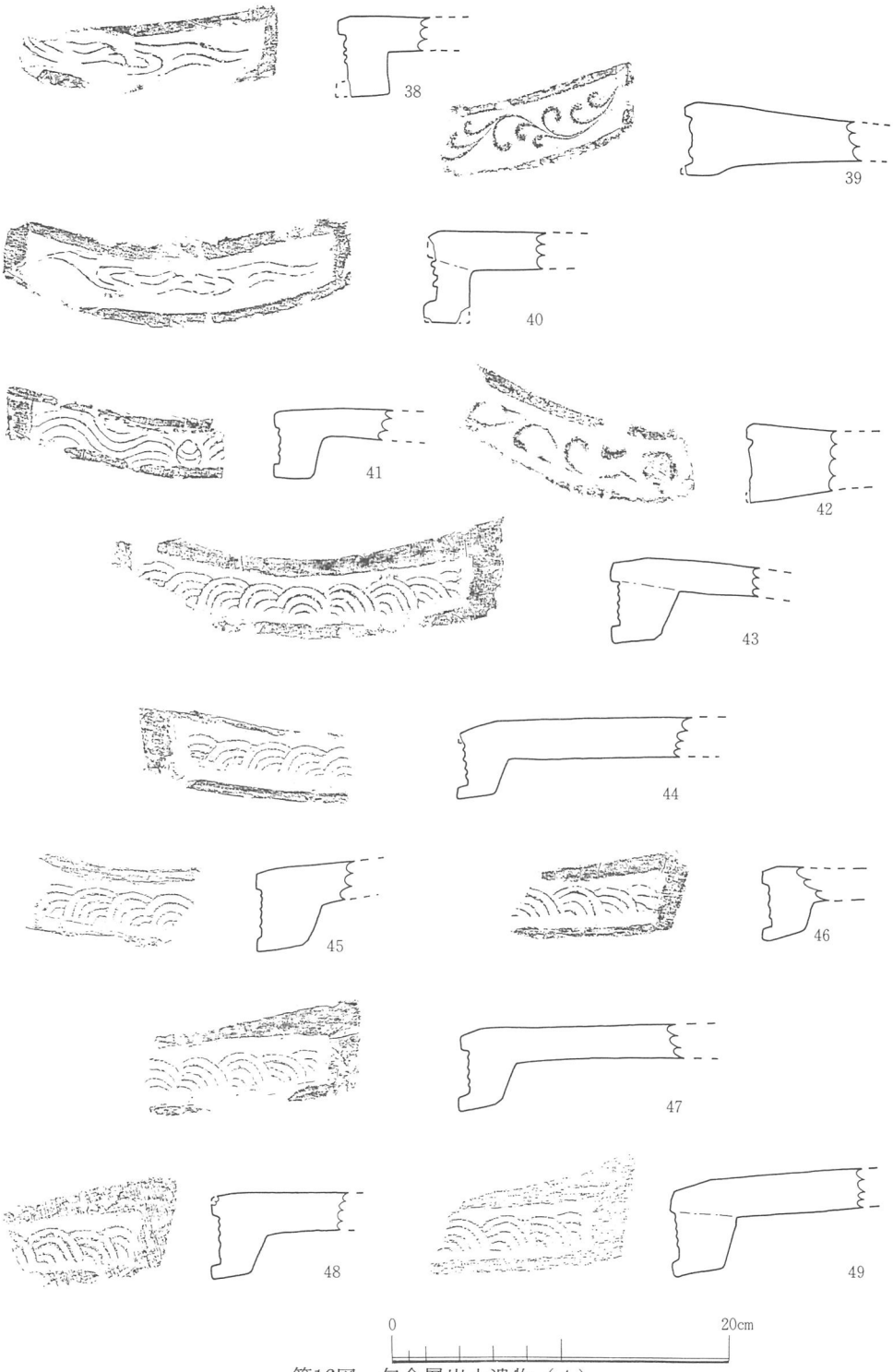
第13図　包含層出土遺物（1）



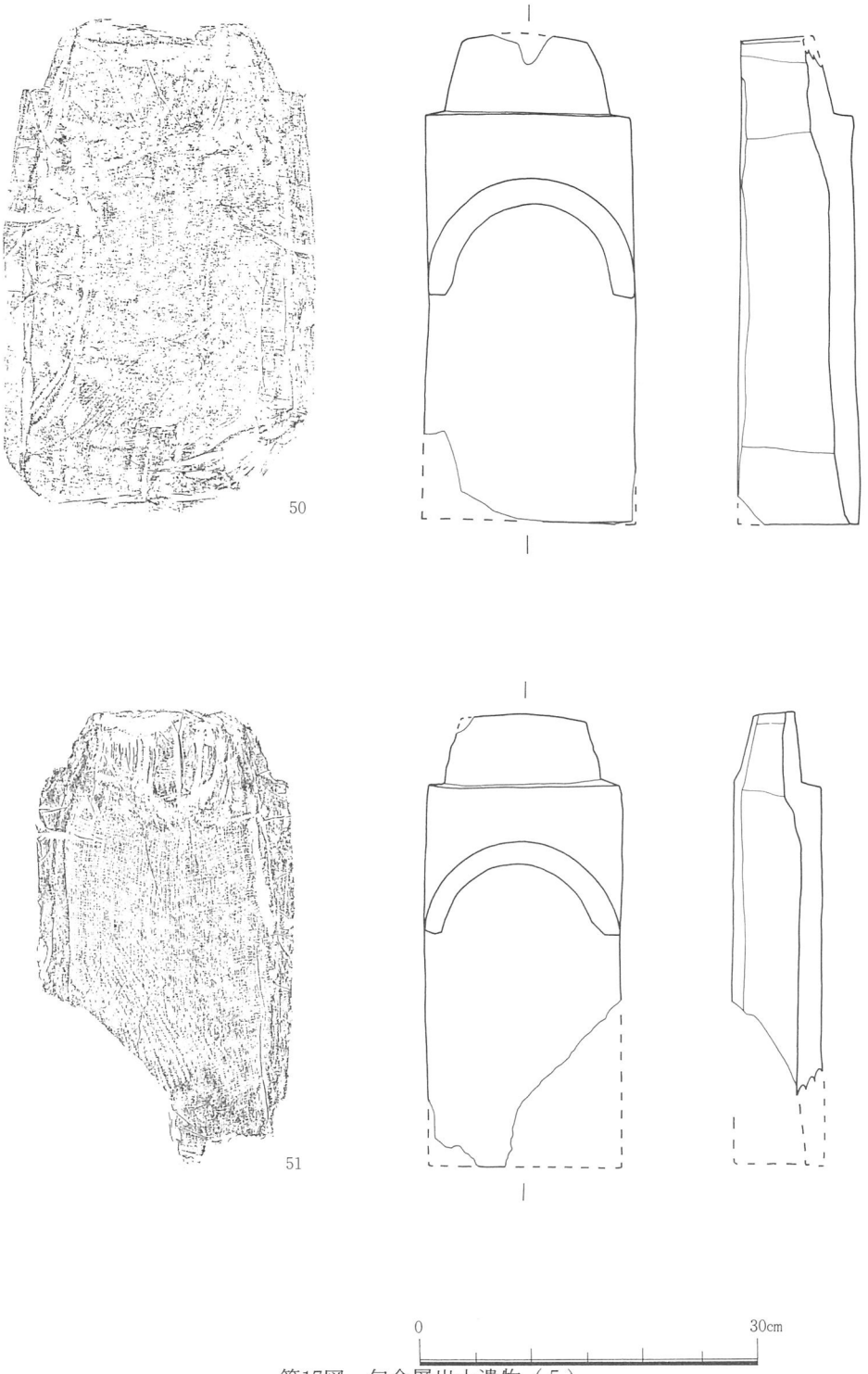
第14図　包含層出土遺物（２）



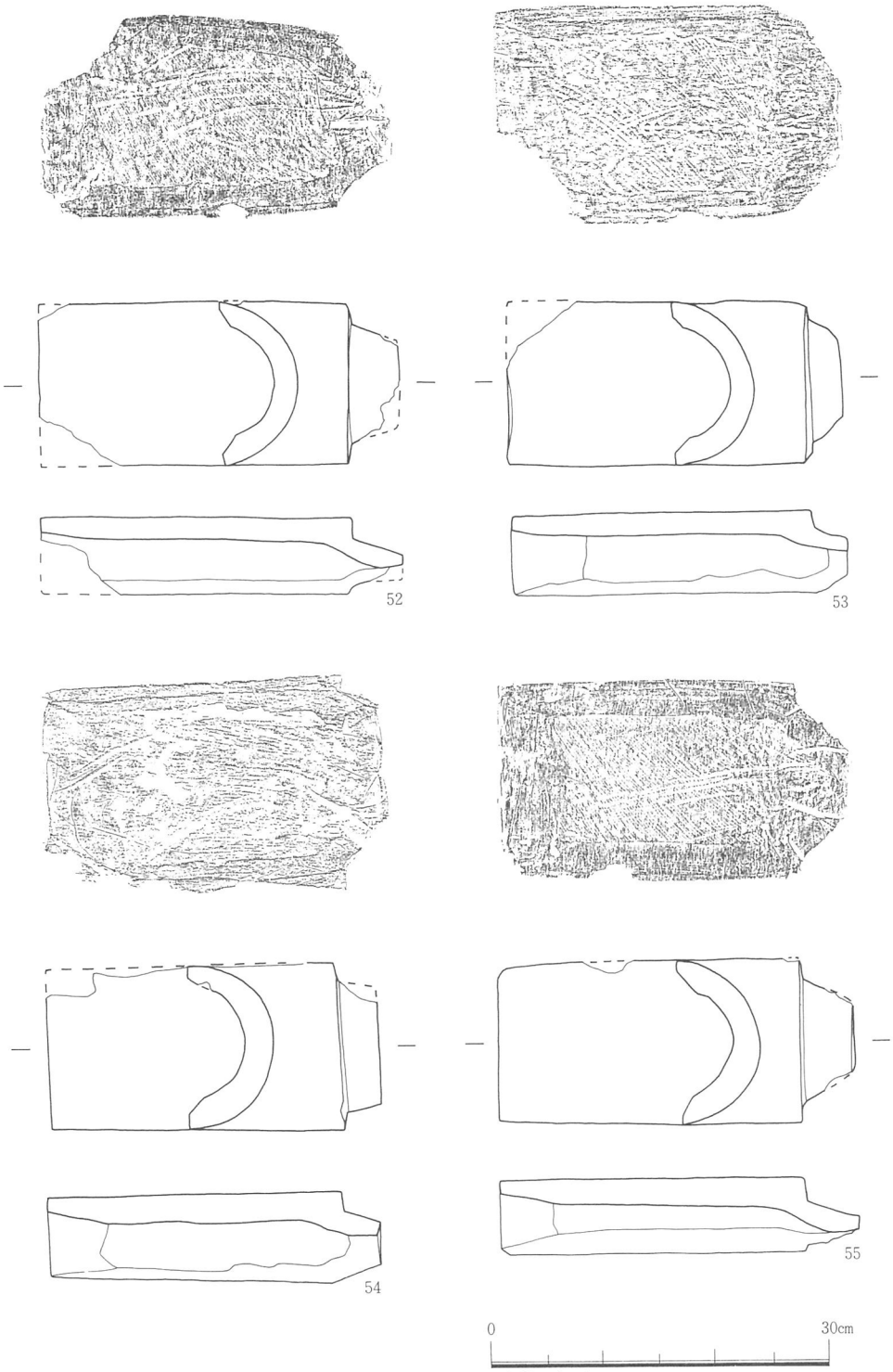
第15図　包含層出土遺物（３）



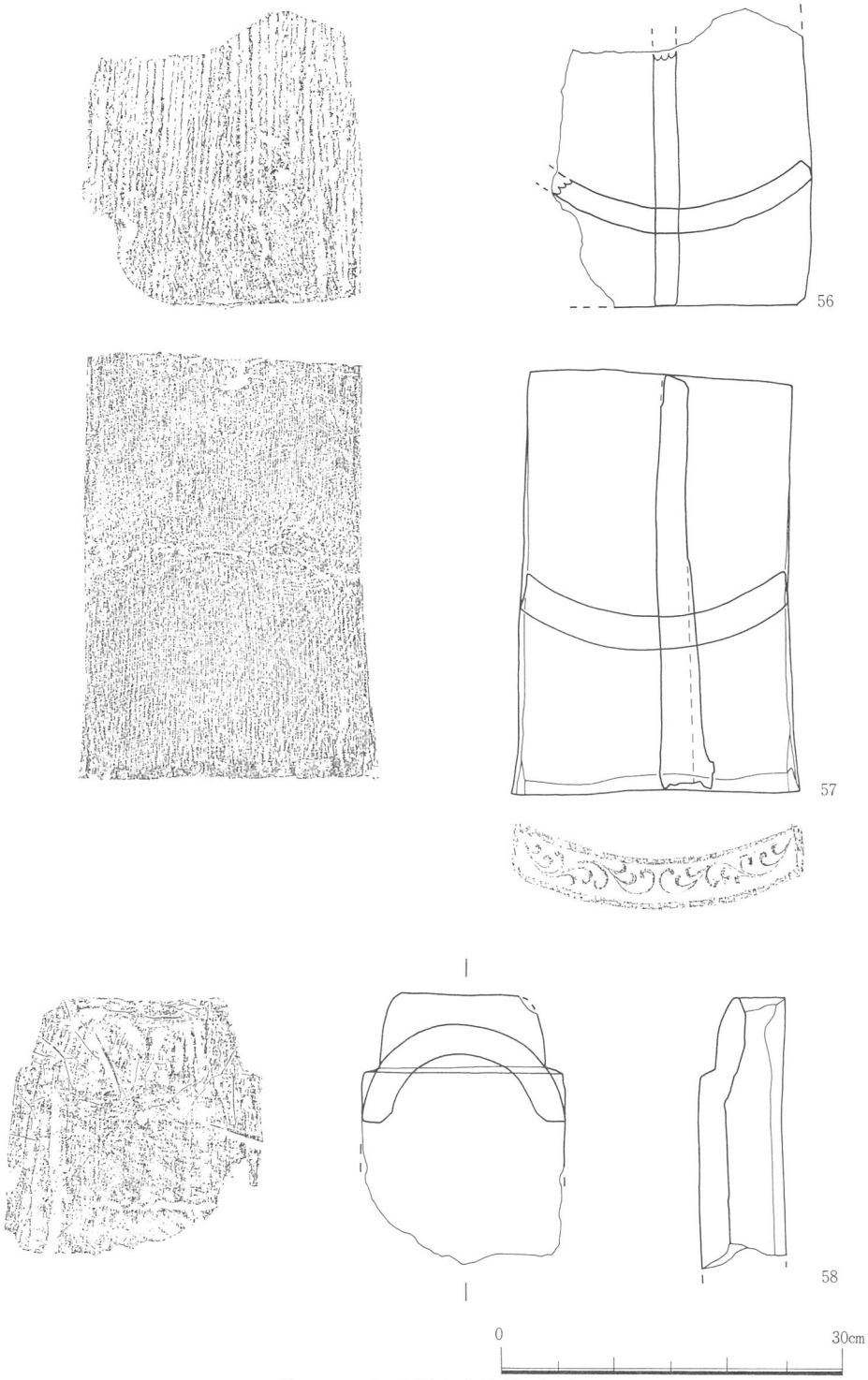
第16図　包含層出土遺物（４）



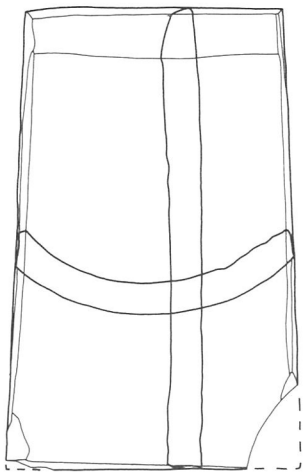
第17図　包含層出土遺物（５）

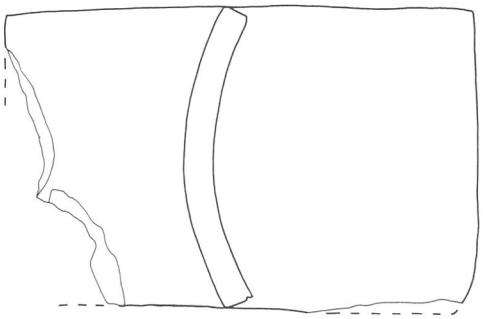


第18図　包含層出土遺物（6）

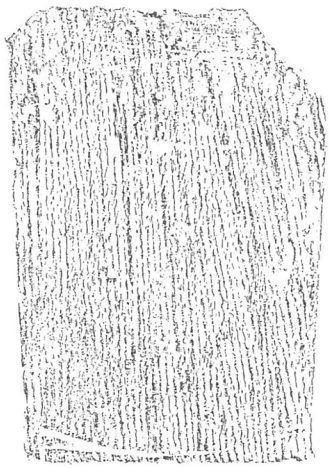


第19図　包含層出土遺物（７）

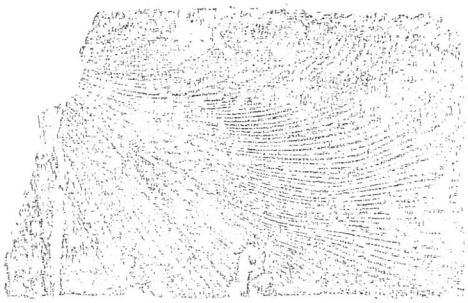




59

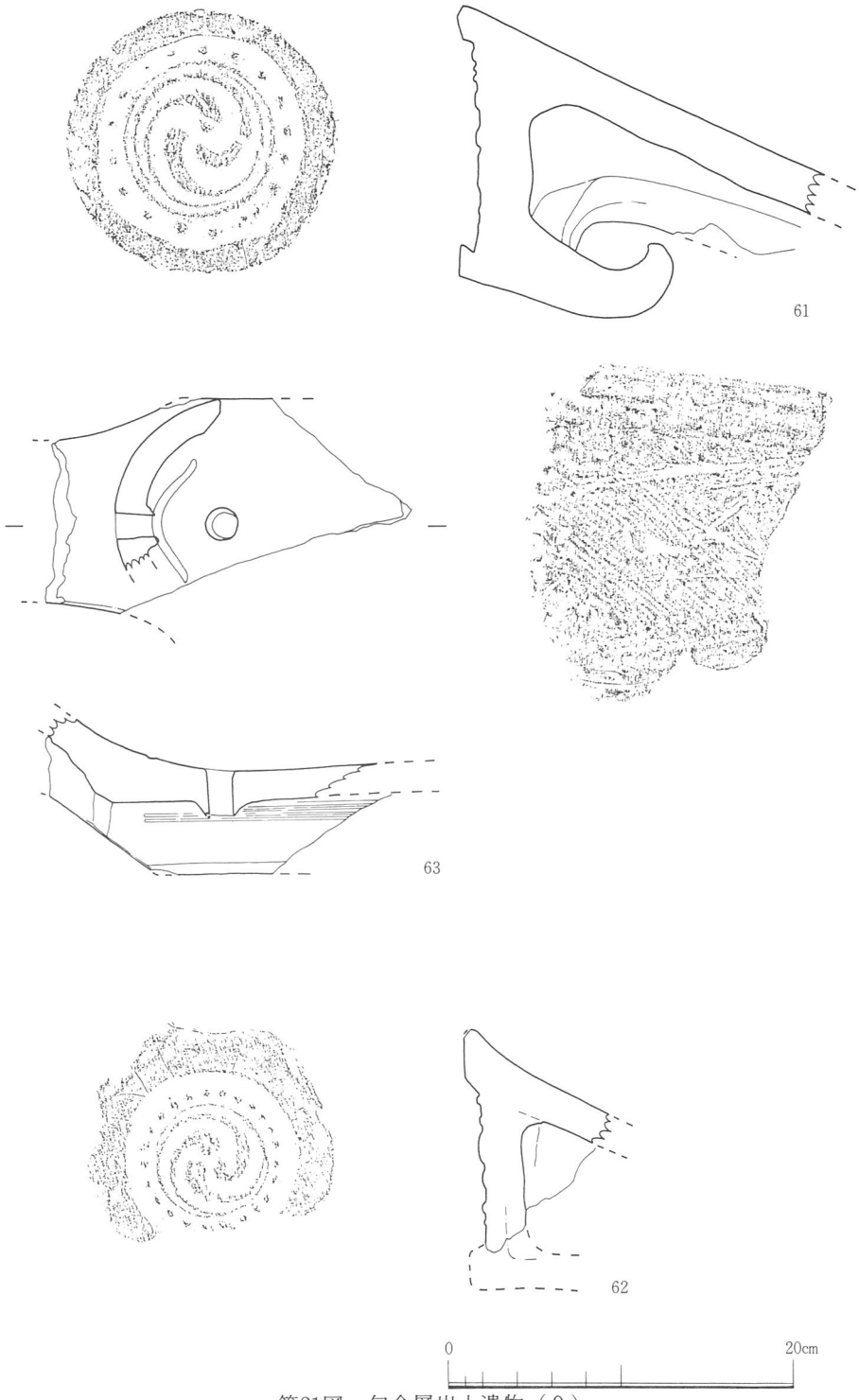


60

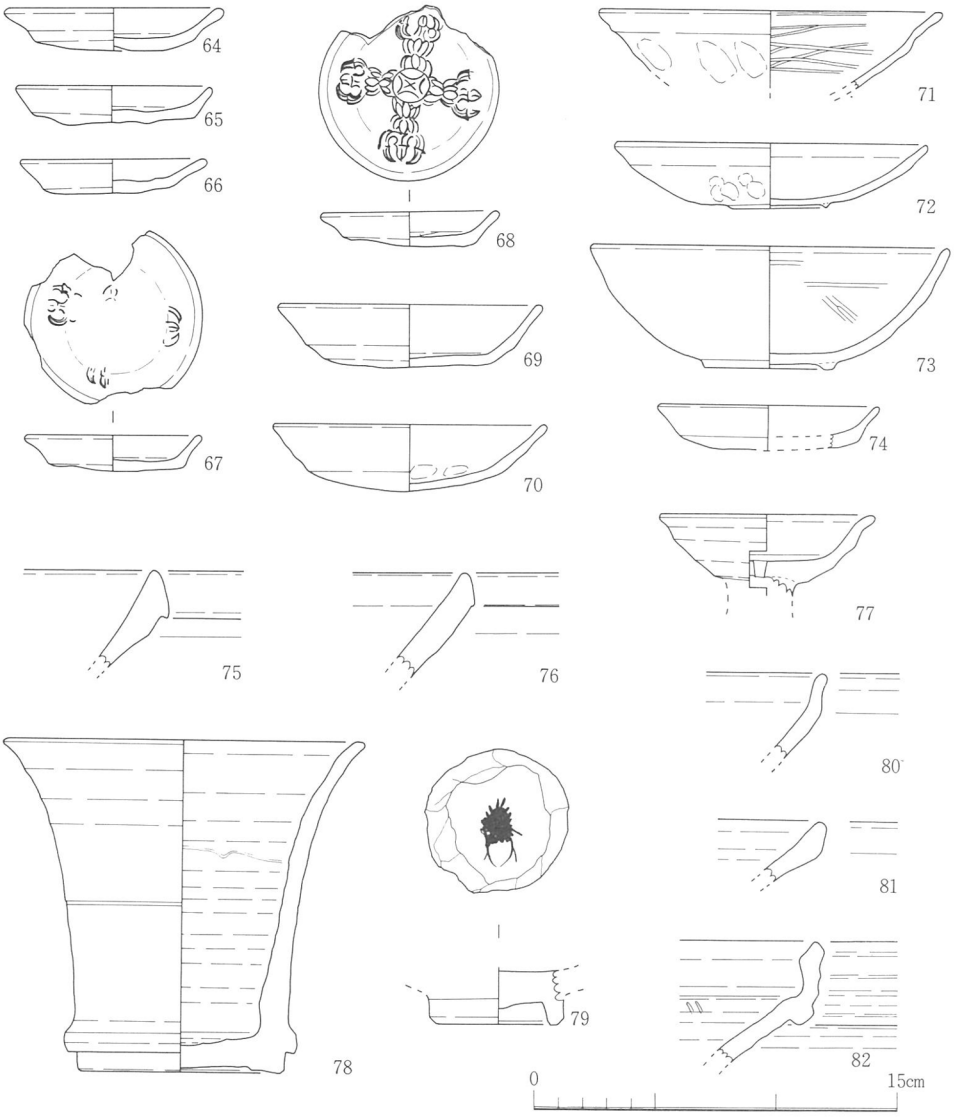


0 30cm

第20図　包含層出土遺物（8）



第21図　包含層出土遺物（９）



第22図　包含層出土遺物（10）

反るタイプの香炉である。外面体部中位に沈線を一条もつ。外面高台脇より内面口縁部まで灰釉を施す。（77）は燭台である。脚部を欠損するが皿部は灰釉を全面施釉する。皿部の中央に灯芯立て用の小穴をもつ。（80）は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。（81）は東播系の須恵質こね鉢である。（82）は備前焼の摺鉢である。口縁部だけの破片であるが、焼成が良好で硬質である。（79）は青磁碗の底部である。内面見込みに印花文をもち、中国製である。高台にそって円形に打ち欠かれている。

第４節　近世以後の遺構と遺物

近世以後の遺構・遺物は調査区全体で検出することができた。

遺構は近～現代の削平を受けているため、いずれも浅く、遺物の出土するものも少なかった。したがって、具体的にどの時代まで遡れるのか決めてを欠くものが多い。

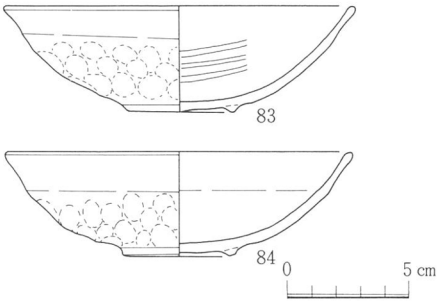
検出した遺構は礎石建物跡、掘立柱建物跡、井戸、土壙、ピット、溝、暗渠などである。

以下、各区別に記載する。

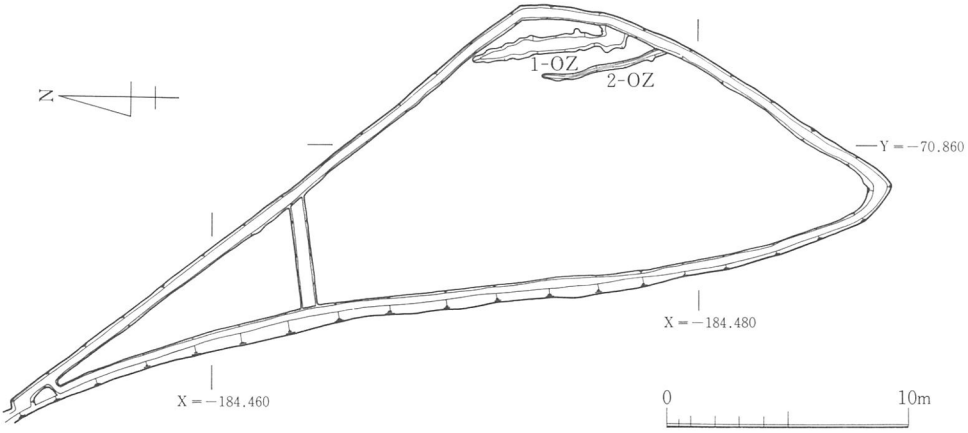
Ａ区　（第23・24図、図版３・17）

調査区の南端に位置する。近～現代の水田にするさいの削平によって遺構のほとんどをうしない、わずかに調査区の東端で南～北方向に走る鋤溝（１－ＯＺ・２－ＯＺ）を２条検出したにすぎなかった。

なお、Ｋ－22ＳＫ地区の地山面にはりつくような形で、瓦器碗を２点（83・84）検出した。（83・84）は共に磨滅が著しく、暗文は（83）の内側面の一部に平行線暗文を認めたにすぎない。しかし、２点共に口縁端部に強いヨコナデ調整、外側面に明瞭な指圧痕、高台断面形が方形に近い点などの特徴を観察できた。



第24図　Ａ区出土遺物



第23図　Ａ区平面図

B区　（第26図、図版４）

A区の西側に位置する。調査区は、釈迦坊川左岸の丘陵に沿う段丘上（T.P＋33.7m前後）に位置し、試掘調査を実施した地点である。試掘調査では、石列、及び多量の瓦が出土した地点である。

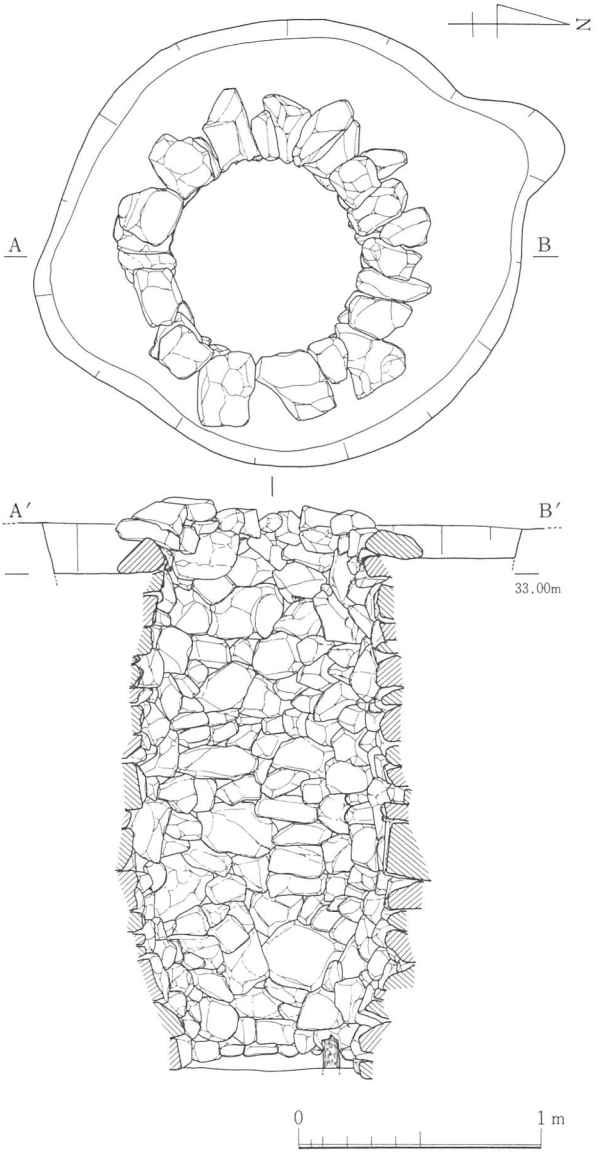
23－OW　（第25・26図、図版７）

B区K－22NE地区において検出した円形の石組み井戸である。口径0.8m前後、深さ2.3m前後、底径0.7m前後を測る。石組みは砂岩の割石積みで、持ち送りに積んでおり、底より約1.0mの箇所で径約1.0mとふくらんでいる。井戸の堀方は、検出面で径約1.8mの円形であった。また、基底部の石を固定する為に打ち込んだと思われる板を数箇所確認することができた。

井戸は埋まった状態で検出し、出土遺物は底部に近い箇所で近世瓦を数点認めたにすぎなかった。

26－OO　（第26図、図版５）

K－22KB地区に位置する。平面形はほぼ円形を呈する土壙であり、直径1.0m、深さ0.6m前後を測る。土壙は桶を埋置していたものと思われるが、桶の痕跡は確認できなかっ



第25図　23－OW平面図・立面図

第26図　B区遺構平面図

た。また、土壙の回りには列石が一部残る。

遺物は近世瓦の細片が少量出土した。他に、26－ＯＯに伴うと思われる礎石を検出した。

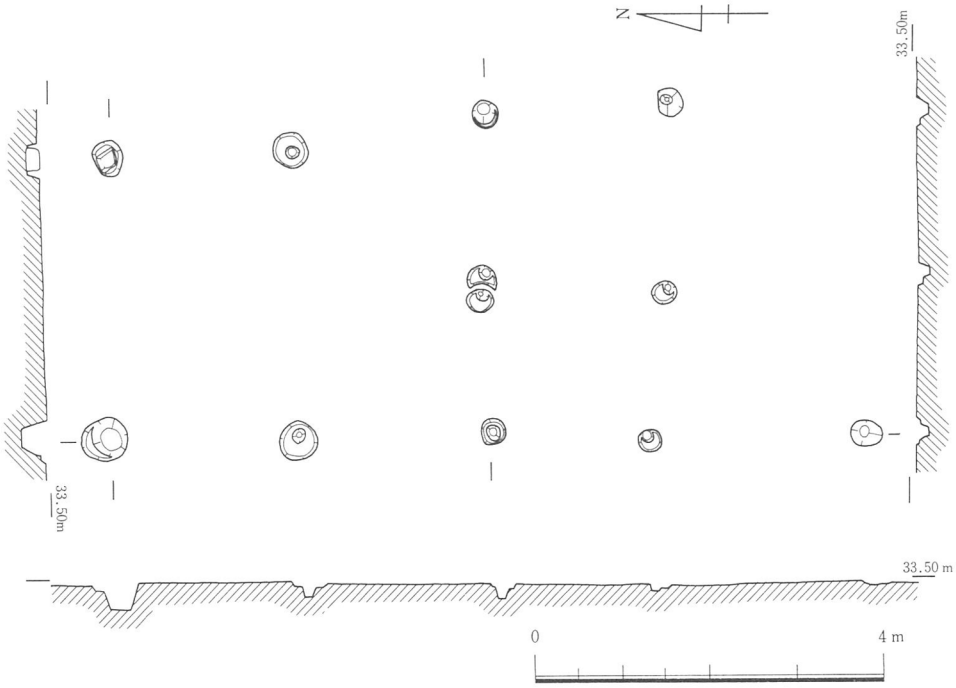
31－ＯＯ　（第26図、図版５）

Ｋ－22ＪＤ地区において検出した土壙である。平面形は、ほぼ円形を呈する。上部を削平されているため本来の規模は不明であるが、直径0.6m、深さ0.45mを測る。82－ＯＸを切って作られている。31－ＯＯも26－ＯＯと同じように桶を埋置していたと思われるが、桶の痕跡は確認できなかった。遺物は瓦、染付、陶磁器などの小片が出土した。

35－ＯＢ　（第26・27図、図版７）

Ｋ－22ＱＧ・ＱＨ・ＲＧ・ＲＨ・ＳＧ地区に位置し、35・41・42・44・47・58・76・77－ＯＰによって構成される南北４間、東西２間以上の総柱建物である。東側の柱穴は削平されているため確認できなかった。方位はＮ－10°－Ｅで、柱穴間隔は南北1.7～2.5m、東西1.8mを測る。

柱穴の掘方の平面形は円形ないし不整円形を呈する。規模は35－ＯＰが径40㎝、深さ17㎝、41－ＯＰは径28㎝、深さ14㎝、42－ＯＰは径25㎝、深さ６㎝、44－ＯＰは径30㎝、深



第27図　35－ＯＢ平面図・立面図

さ11㎝、47－ＯＰは径30㎝、深さ40㎝、58－ＯＰは径30㎝、深さ３㎝、76－ＯＰは径50㎝、深さ30㎝、77－ＯＰは径30㎝、深さ10㎝をそれぞれ測る。遺物は出土していない。

40－ＯＸ　（第26図、図版４・６）

Ｋ－22ＫＡ～ＫＤ・ＪＣ・ＪＤ地区にまたがって検出した石列である。石列は調査区内を南～北方向に走るが、北側を83－ＯＸによって切られている。また、南側は削平されているため、石列を検出することはできなかった。石列は東側の側面を揃えて並べられている。現存長2.0mを測る。

62－ＯＯ　（第26図、図版４）

Ｋ－22ＰＦ地区に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。直径約0.8m、深さ８㎝前後を測る。遺物は出土しなかった。

63－ＯＯ　（第26図、図版４）

Ｋ－22ＰＦ・ＰＧ・ＱＦ・ＱＧ地区にまたがって位置する。平面形はほぼ円形を呈する。直径約1.8m、深さ６㎝前後を測る。遺物は出土しなかった。

72－ＯＰ　（第26図）

Ｋ－22ＯＧ地区に位置する。平面形はほぼ円形を呈する。直径約0.4m、深さ0.2m前後を測る。遺物は出土しなかった。

73－ＯＰ　（第26図）

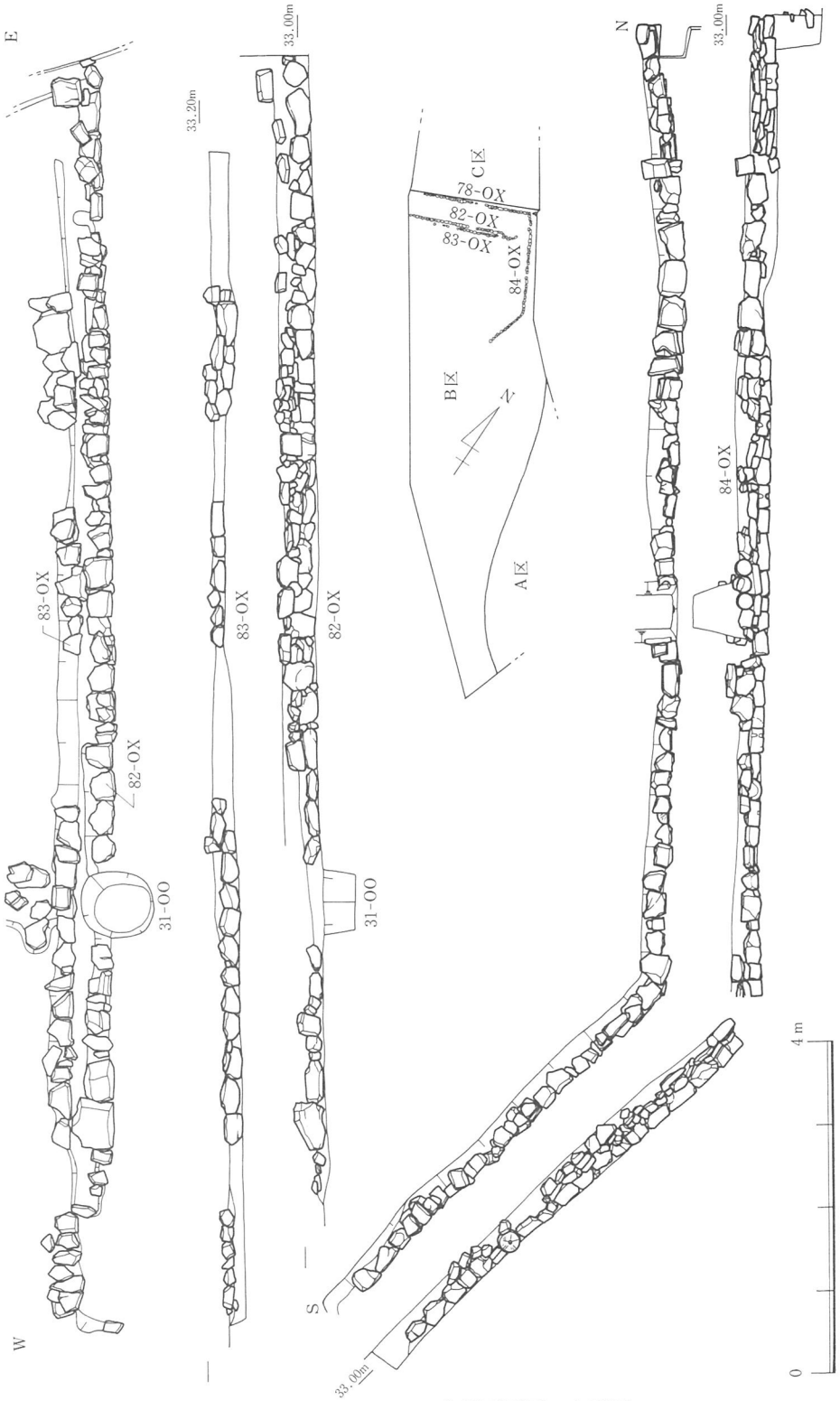
Ｋ－22ＯＦ地区に位置する。平面形は不整な円形を呈する。直径約0.4m、深さ0.15m前後を測る。遺物は出土しなかった。

80－ＯＳ　（第26図）

Ｋ－22ＫＣ・ＫＤ地区に位置する。溝は東～西方向に走るが、両端を削平されている。このため、本来の規模、形状は明らかでない。検出長2.0m、幅0.25m、深さ５㎝前後を測る。遺物は出土しなかった。

82－ＯＸ　（第26・28図、図版４・６）

Ｋ－22ＫＡ～ＫＤ・ＪＣ・ＪＤ地区に位置する石積み遺構である。石積みは調査区内を東西方向に走り、ほぼ中央部を31－ＯＯによって切られている。石積みの残存部の長さ約13.5m、高さ0.4m前後を測る。石積みの最下段には、長径0.4m前後の石が北側の側面を揃えて並べられている。石積みは最も残存状態の良好な部分で２段を数える。石積みは、上部および両端が削平されているため、本来の規模や遺構の性格などについては不明である。

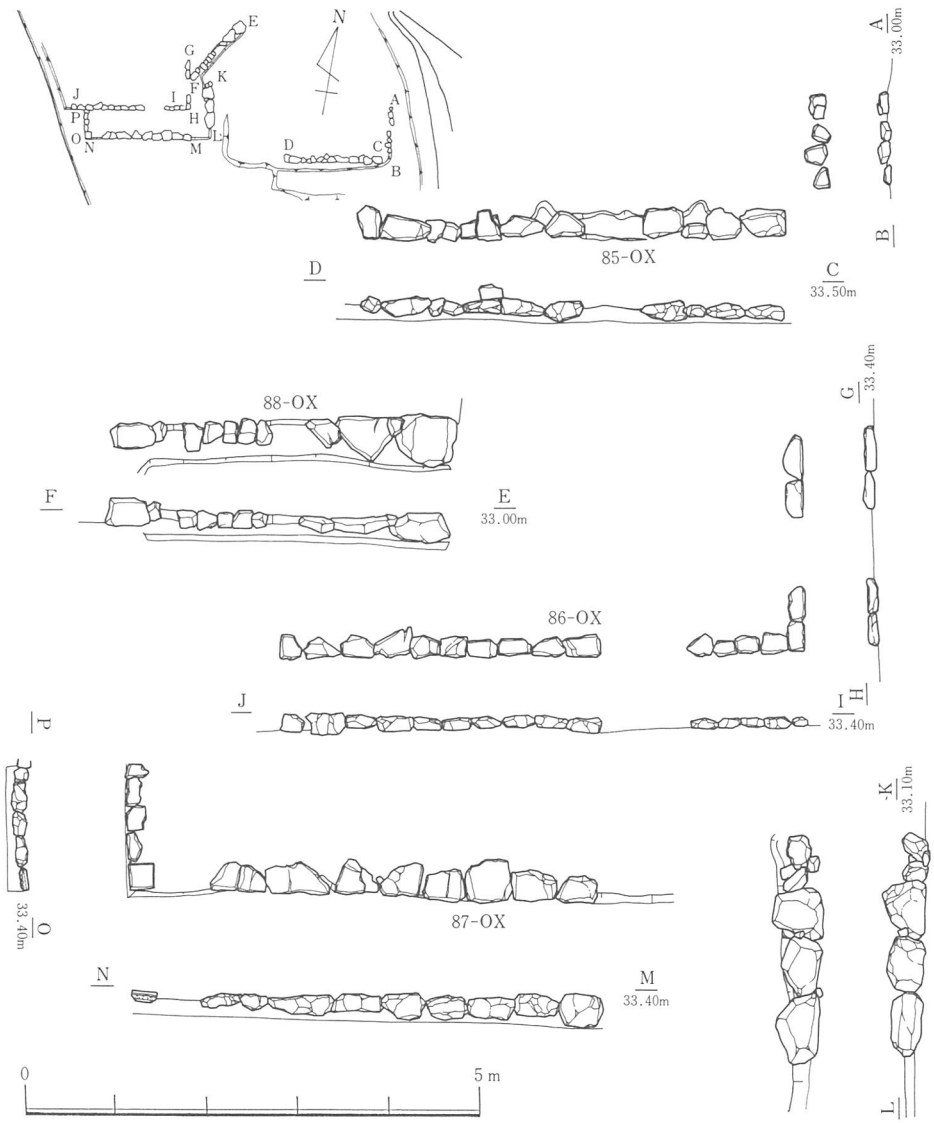


第28図　82・83・84－ＯＸ平面図・立面図

83－ＯＸ　（第26・28図、図版４・６）

Ｋ－22ＪＤ・ＪＥ・ＫＣ・ＫＤ地区に位置しており、82－ＯＸの南側に平行して作られている。

石列は、上部及び西側が削平されているため、本来の規模や遺構の性格などについては不明である。石列は北側の側面を揃えて並べられており、残存部の長さ約12.3mを測る。



第29図　85・86・87・88－ＯＸ平面図・立面図

84－ＯＸ　（第26・28図、図版４）

Ｋ－22ＩＥ・ＪＥ・ＪＦ・ＫＦ・ＬＦ・ＭＦ・ＭＥ地区において検出した石積み遺構である。石積みは調査区内を南～北方向に走り、南側は約45°屈折し、南西方向に走る。石積みは、上部および両端が削平されているため、本来の規模や遺構の性格などについては不明である。

石積みの残存部の長さ約17.4m、高さ0.4m前後を測る。最下段には、長径0.4m前後の石が東側の側面を揃えて並べられている。石積みは最も残存状態の良好な部分で３段を数え、石積みの石材として墓石（第50図277）、石臼未整品なども使用されていた。

85－ＯＸ　（第26・29図、図版４）

Ｋ－22ＯＧ・ＯＨ地区に位置する石列である。石列は調査区内を東～西方向に走る。両端は削平されているため、本来の規模などについては不明である。

石列の残存部の長さ約3.5mを測る。南側の側面を揃えて並べられている。

86－ＯＸ　（第26・29図）

Ｋ－22ＯＤ・ＯＥ地区に位置する石列である。調査区内を東～西方向に走り、東端部はＬ字状に屈曲し北方向に延びるが、西端は削平されているため本来の規模は不明である。

石列は残存部の長さ８ｍを測り、長径0.3m前後の石が南側の側面を揃えて並べられている。

87－ＯＸ　（第26・29図）

Ｋ－22ＯＤ・ＯＥ地区に位置し、86－ＯＯの南側に位置する石列である。調査区内を東～西方向に走るが両端は削平されているため、本来の規模は不明である。

石列は残存部の長さ4.2mを測る。長径0.5m前後の石が南側の側面を揃えて並べられている。

88－ＯＸ　（第26・29図）

Ｋ－22ＮＥ・ＮＦ地区に位置する。調査区内を北東～南西方向に走るが、両端は削平されているため、本来の規模や遺構の性格については不明である。

石列は残存部の長さ3.6mを測り、北西側の側面を揃えて並べられている。

包含層出土の遺物

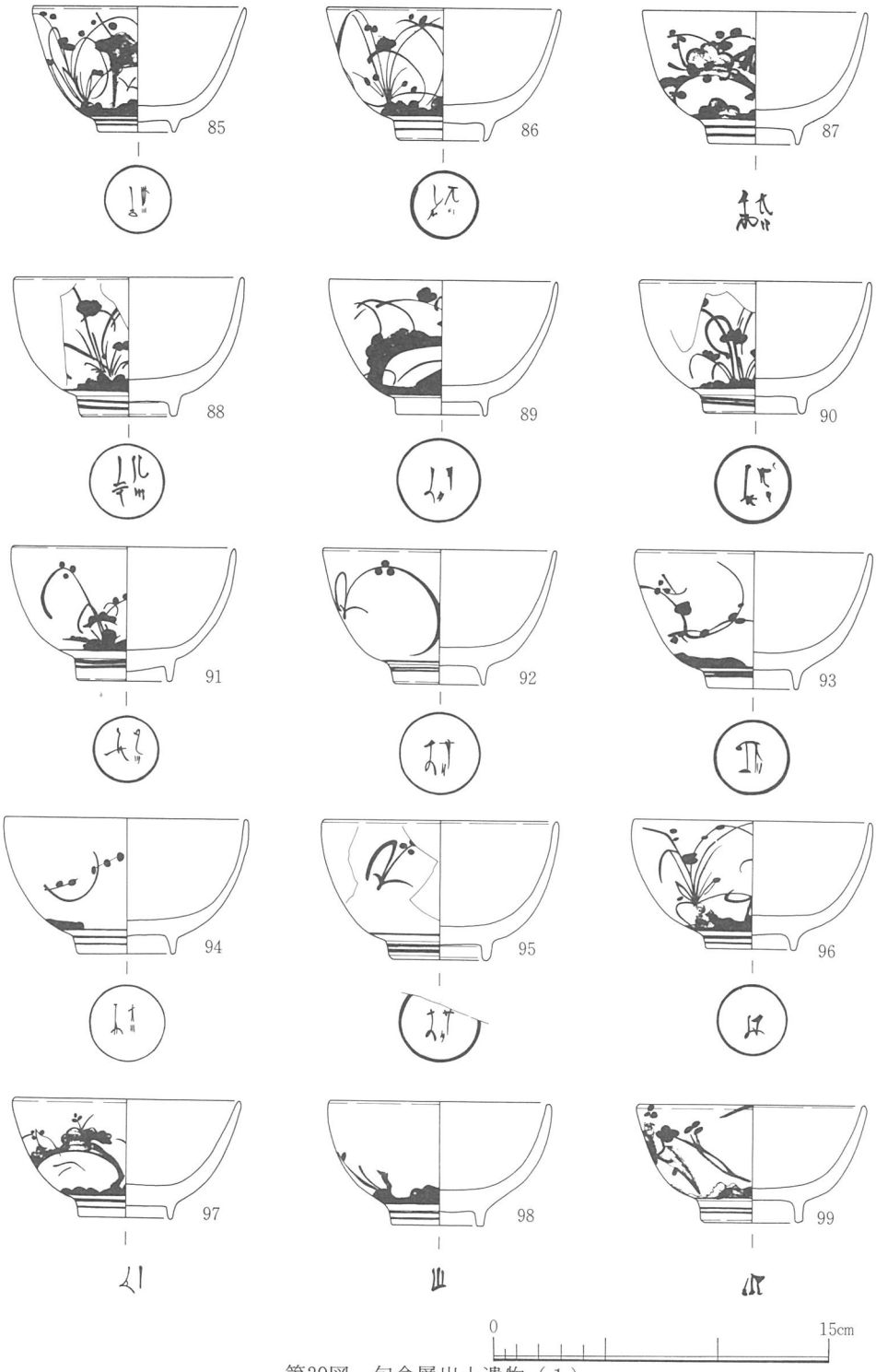
Ｂ区の包含層からは、磁器、陶器、瓦、石製品（石臼）、石造物（墓石、五輪塔、板碑）、銭貨などが出土した。こうした出土遺物のうち、その大半量を占めるのは陶器と瓦であった。

以下、主だった遺物の記載を行うが、個々の法量詳細については、観察表を参照されたい。

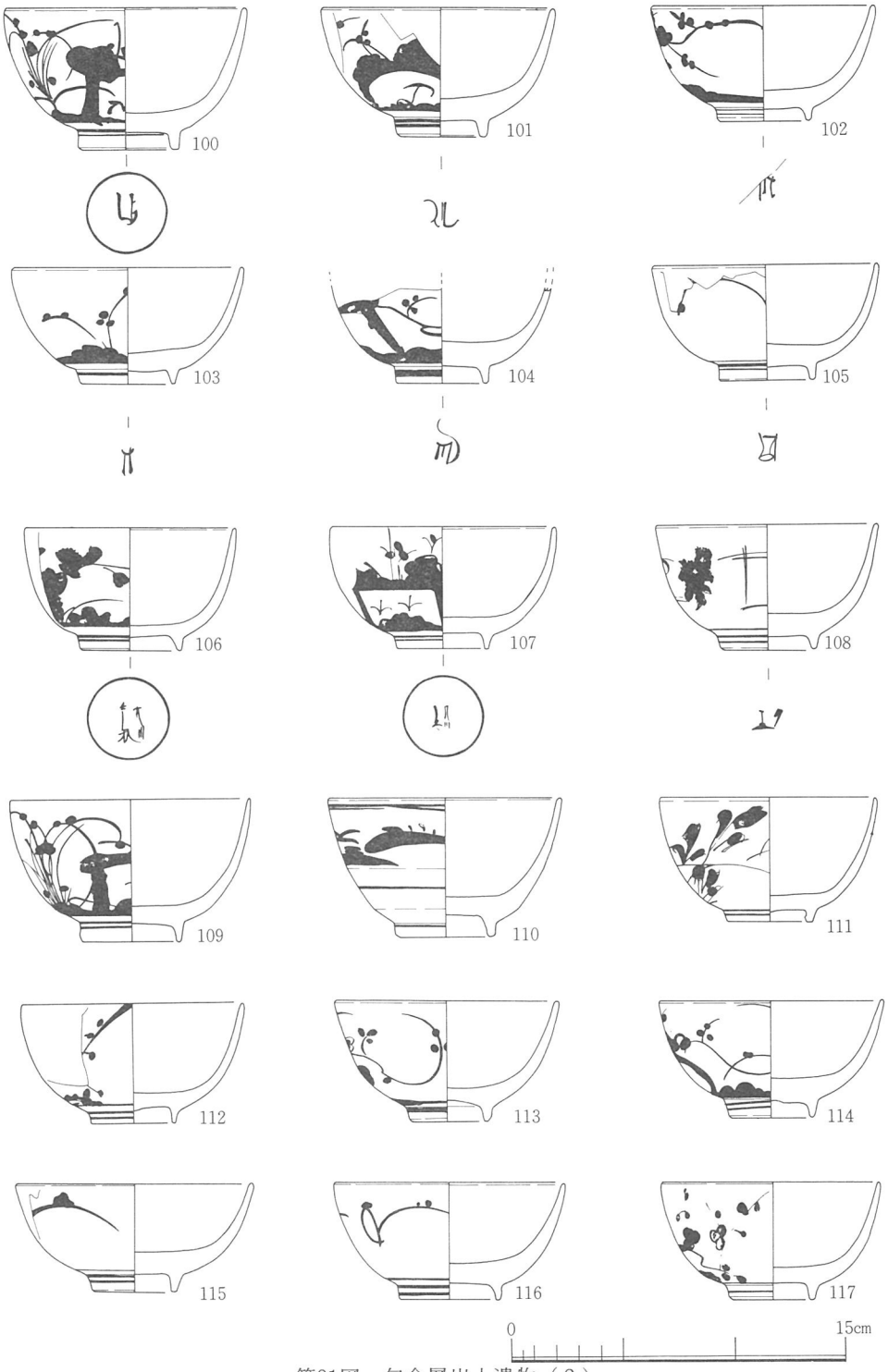
磁器　（第30・31・32・33・34・35図、図版18・19・20・21・22・23）

（85～156）は染付で、そのほとんどが伊万里焼である。（85～139）は碗である。（85～123）は所謂「くわらんか手」と称される一群である。全て内面は無文であり、そのなかで（85～108）は高台裏に「大明年製」などの呉須銘を持つものである。外側面の文様は草花文（85～105・107・109～117）が最も多く、菊花文（106）、井桁に菊花文を3単位（108）、花文（118）、印判による3単位の菊花文（119）、横縞文（120）、二重網目文（121・122）、唐草文（123）がある。（115・118・119）の内面見込みは釉を輪状に削りとっている。（98・104・110）は全面に粗い貫入、また（106）は全面に細かい貫入がはいる。（110）は釉がやや不透明で白濁した感じである。（106）は胎土がやや軟質で、色調も褐色味を帯びる。（124～128）は器壁が「くわらんか手」のものより薄く仕上げられ、呉須も丁寧に施されている。全て内面は無文であり、高台裏には「大明年製」の呉須銘が施される。外側面にはそれぞれ菊花文（124）、菊花と団扇を配したもの（125）、梅花文（126）などが描かれる。（129～131）は器高と口径の値がほぼ同じであり、ずんぐりした形である。全て内面は無文である。外側面には一重網目文（130）、草花文（129・131）の文様が施される。（130）は（121・122）よりも先行するタイプである。（129）は内面より外面高台脇まで施釉し、他は露胎である。（130）は高台内と他の部分との施釉作業を異とする。（131）は全面施釉後高台畳付部分の釉を削りとっている。（132）は小碗であり高台裏に「大明年製」の呉須銘をもつ。（133）は器高が口径の1/2以下の底の浅い碗である。外側面には蕉葉文が、内面口縁端部には四方襷文が描かれる。（134）はやや大ぶりの碗であり、唯一内面見込みに花文と圏線を二条配す。外面は風景文を描く。（135～139）は筒型の碗である。（135～137）は内面見込みに五弁花の印判を持つ。また腰部でほぼ直角に屈曲するが、（138・139）は丸味をもってカーブする。外側面は斜交線文（135）。（136）は草花文、（138）は印判で松をあしらったもの、（139）は風景文を施す。（137）は青磁染付であり、外面は青磁の釉が施される。内面口縁端部には四方襷文を配する。また（135・136）は内面口縁端部に圏線を二条配する。

（140・141）は皿である。（140）は内面に樹木のある風景を描く。（141）は内面見込みの釉を輪状に削りとっている。内面体部は斜交線文を施している。（142）は蓋である。外面体部には花文を有し、内面は口縁端部に四方襷文を配する。（143）は蓋物で、外面



第30図　包含層出土遺物（1）



第31図　包含層出土遺物（２）